

嫌ひせ給ふは癖故、此湯元の温泉おんせんもまばらくは保養ほくやう何よりには機嫌も
相叶ひ、私始め誰たれも、大悦至極と述べれば、もどかしそふもその朝が、ほ
んよいつもの座敷と違ひむづかしい此酒事さか、盃の流れて来る間も、梅を
題も歌一首づゝ讀趣よむしゆ向、野風様おまへの何ぞ出来たかいなア、其朝様と
した事が、こんな所で、氣がはつてどふも趣向おもしろが浮ぬわいな、成程、
野風殿のいなるゝ通り此傳内も頭痛づつ八百、最前さいぜんを五六百枕をわつた拙
者とが、こしおれ、いづれもお聞せやそふかど、顔も似合ぬ傳内が、詞も隨次
郎さしよつて、是こゝ、傳内殿、いまだ一人も讀よざる内夫うちのお早はやひ、其
歌のいかゞでござるな、ヤ我身ながら天晴秀逸あつせういつと存ずる、其歌のいかに
も有ふか、初雪や犬の足跡、梅の花といどふでござらふな、ホ、傳内様と
した事が、そりや歌じやない、見立ての發句はつ、そして、春の心を初雪とい
ふ、大きな季違ひでござんすぞへ、ク、是は其朝殿、氣違ひといそりや何

の事、拙者亂心の仕らぬと、眞顔もなつたるおかしさを、袖も隠してこらゆる人々、殿も興も入り給ひ、傳内腹立てな、今其朝が季違いと、ふたひな、春の心を初雪と冬の季と取り違へ、發句を歌と心得たそちが誤り、過怠より大盃と、岩代を盛つふせ、早ふくく、其朝野風、逸ても逸がさず無理やり、銚子の口からがぶくく、ほめんくくと、閉口の心地よくこそ見へよける、兩人扣へい、もふよいく、梅を題とする貢之助が讀歌い、夫々どかたへある料紙引寄せ、盃へさらくくと書終り、其朝是を讀で見よと、差出し給へば、押戴き、閨近き梅の匂ひの朝なく、あやなく戀の増る頃かな、お心有りげな此一首、鶯蛙も歌を讀貢之助が戀の歌、とくと吟じて返事せい、此其朝も、朝なく、あやなく戀の増る某歌の心はかための盃、戀は曲者赦せくと、扇子を顔も其朝が手を、むりやりよ引寄せられ、云かいたる源八へ立る探も打わつて、云よいりれ

ぬ此場の時宜態と紛らす笑ひ聲、調、賤しい此身を勿体ない、おまふり
なされて下さりまするお、なぶらぬ偽りいぬ、我遊興も事寄せて召
寄せたる其心戀も上下の隔へだてないぞよ、スリヤは眞實でござりまするか、
どい、はつと斗りよ其朝がまべし詞もなかりしが、漸やうやく顔を上げ、敬
ならぬ身を夫程も思ひ給ひる有難さ、お心も随したがひてお寐間のお伽も致
したけれど、深き願ひをかけまくも神も誓ちかひし此身の上、お詞を背く科、お
赦し有て此事斗りい只幾重にも、思し召切り給ひらば、猶此上のは
慈悲と明けて夫とい岩田帯結び初めたる戀中をつとむと知らぬ貢之
助例の持病の短氣虫俄にわかも不興のは氣色、調、心得ざる今の一言情の道を
表とする遊君の身を以て、何故心も随ひぬ子細をゆせといだけ高其朝
猶も會釋して、たとへばどの様もかつまやつても、此事斗りは今爰で割
ていどぶも、いはれまい、殿のは詞聞き入れず問夫狂ひする徒女、

其儘又差置ては殿の威勢薄きと似たり、鹿を馬と仰せられても背く者なきは上意を聞き入れぬ不敵の女、其儘又赦されぬと、そやしかくれば貢之助面色くわつとせき立給ひ、今傳内が如く、只一人も某が詞を背く者なきは、恥を與ふる女が振舞、心又随へば其通り、異義又及ぬ、今目前、討て捨るが、何と、恐れ有るは意ながら、縦お手討蒙る共、お寐間の穢さぬ我心底、夫憎しとて命を召さるゝとても、さらくお恨どの存じませぬ、は存分又遊ばせど、覺悟極めし其風情、重く過言の其舌の根、留てくれんと床几、ひらりと見へしは差添、さへどいむる龜次郎、野風も俱又押しめ、は立腹の段は尤もいへ共、流れの女は勿躰、い、お手おろさるゝ迄もなく、此龜次郎が後、程迄色よい返事致させませふ、是、夫で、大事ござんせぬいな、此野風も俱よくとさ落すが里の手管、木折りよならぬが戀の道、成程野風の通り、障りな

がらひきげんを直し有て某もお預給はらば、くどき落して手生の花、
先づ夫迄は湯元の座敷、酒宴とすしむれば、若殿面を和らげ給ひ出
かしたり龜次郎、其朝が色よい返事時刻の幸ひ此驚恥とそちよ預けた
ぞ、テシは秘藏の驚を返事の時刻とおつゑやる、其驚の銘の三光三
更迄よ色よい返事心得たるか龜次郎、ハッ、委細承知仕るは秘藏の此驚ま
かど預り奉り、閨の初音を上げさすか、經讀鳥とうきめを見せるか、生死
の境の三光の鳥よよそへし時刻迄きつと返事を待どよと、詞番ひのい
もせ鳥、森口野風傳内も打つれ、てこそ入よけり、跡よ一人、其朝が身の
納りをとやかくと、あん心詫たる折から、始終立聞足輕源八、そつと立
出見合す顔、源八様か、高いく、さつきよからの一部始終、聞ては居た
が殿の、前殿様の日頃の短慮、龜次郎殿の働きで、暫く事の鎮まれど、
そちよの深きは執心、お寐間の伽り、其身の出世、氏なふて玉の興、乗かへ

て見る氣のないかと持たせぶりある詞の端聞其朝の恨顔、胸欲な源
入様、別れ程へし今度のお下り高い底いの隔氣でそもや殿は、惚らり
よか、うき川たけの仇枕夜毎日毎の客の數、幾万人の其中、眞實心、下
紐を、どいて逢の、只一人、互の誠が通じたる願叶ふて此お中、産落した
らどふしてと、年の明くの指を折日をかぞへ、二人が内、添乳して、世
帯するのを樂しみ、思ふてぬるをむこらし、い、まや、いや、く、ど一筋
、思ひ詰めて、い、それ、まや、程、くち、涙、ぞ、誠、なり、源、八、ほう、と、持、扱、い、そ、ふ
い、や、れ、バ、皆、尤、人、は、知、ら、さ、ぬ、忍、び、合、も、思、ひ、が、け、な、き、殿、の、執、心、後、日、ま、ま
れて、い、不、忠、の、至、り、と、跡、先、忘、れ、て、今、の、様、い、ふ、た、い、お、れ、が、わ、る、か、つ、た
了、簡、して、た、も、そ、ん、な、ら、堪、忍、す、る、程、い、人、の、來、ぬ、間、ま、ご、ざ、ん、せ、と、手、を
取、れ、バ、晝、中、ま、め、つ、そ、ふ、な、ど、斟酌、す、る、を、無、理、や、り、ま、手、を、引、連、て、入、る
跡、へ、譯、有、中、ど、い、人、目、ま、も、な、ま、め、く、野、風、鶯、の、籠、持、出、る、跡、方、い、變、又、喰、付

餌摺鉢摺子木携へ立出る、野風のふたの傍を見廻して、レシ龜様、お前まへ又云いね
ばならぬ事が有る、レ傳内でんないめがア間まがなすきがなくどきくさつて、わまや
うるそふてならぬいな、夫おつとの大きおほいお仕合せ、お目出たふ存ぞんじませ、
そんなてんごういいのすど、とつくりと、相談さうだんえて下さんせいなく、
高たかひ、レ誰たれやら来るぞふな、レそつちへ寄つた、と無理むりよ手を取
押おやりて、時とき又只今仰おほられた、其傳内そのでんないよ身を任まかせたらどふ有ふ、
抱だかれてねるが上分別じゆんべつど聞きく野風のふたのつかく、と、傳内でんないと抱だかれてねて、お前の心
が濟すけかいな、濟すけか濟すけぬか知つたかい、傳内でんないつらと云いい合せ、人ひとを化ます狐
め、頬ほを見るもいま、レしいと、すんど立つを引ひき、胸むね欲ほでござ
んする、其そのさのり文句もんく古ふるい、最もちつとひざる所ところなれど、つと爰こゝ
らで堪かん忍にんせい、そんなら疑うたがひ晴はれたかへ、お前の疑うたがひ晴はれたれば、私わたしが胸むねの
疑うたがひ、次手つぎよはらして下さんせ、レなせよ、さればいな、定さだてお國くにへいさ

んまたら云号の奥様や、外又増花色と面白事端手な事、さまくの
樂々み私が事の露程も、思ひ出して下さんすまいと、打恨たる其風情
其事の氣遣仕やんな、小野小町が再來ても、外の女とはだふれね證
據といふに、此笄殿様は拜領命もかへぬ物なれどそなたへ渡す、
片しのこつちも持て居る、摸様の水は鴛鴦の、たどへ番のはなる共、又
廻り逢相紋と、渡せば野風が管を、龜次郎が手渡し、國と東の隔ても心の
傍も宮仕、又逢迄の下紐を解ぬ印も此管取て置て下さんせ、そんなら夫
も違ひないか、お前も違へて下さんすま、何の違はふ、嬉しと抱き付や
ら吸付く拍子、鳥籠バつたり餌も水も、こつばい微塵も南無三と、爰を直
せばあちらか離れ、逆様もまづ横よしつ、うろくもがく其隙も籠を放
れて鶯の、行方知れず飛されば、狂氣の如く龜次郎、野風も俱に詮方なく
斬れ果て立たる所へ、岩代傳内つくと出、龜次郎、儂野風とどち狂ひ、

秘藏ひかくの鶯ういを取逃にがせし不届者とどろと、何がなわたる戀こひの意趣いしゆ立出た給たまふ貢殿みつぎ例れいのほ短慮たんりよは氣色きしきかわつて見入みいければ、はつと斗とまうるくど、どふ成事なりごとぞと、あんじ居いる傳内でんないのしたり顔かほ龜次郎かみじらう何猶豫なにやうい切腹きつぷと詰寄つめよれば、え持もて傳内でんない秘藏ひかくの鶯ういを取放はなせし科人かじん切腹きつぷは叶かなはぬと、額ひたいは青筋あおぢい短慮たんりよの虫むしひらりと刀拔やいばき給たまふ、走出いたる民谷源八たみやげんぱちは手ては絶たつて先まへと押し留とどめる、其顔かほきつと打詠うちよめめ、其方かたの何者なにものなれば、我手討われてを妨さまたげずぞう、小身者こみづかの私わたしいまだは目見めみへも仕つからねば、は見知みしりなきいは尤私なほわたしめの民谷源八たみやげんぱちとやて、此度このたびのほ供たねは相加ありし歩仲間あゆな斯かは留とどめやすのも、殿とののほ爲ため纒むす小鳥こどり一羽ひとは二人ふたりの衆しゆをほ手討てむざんとやいわん非道ひだうとやいわん、無道むだうの君きみと謗そとを受うるお家の耻はにかみ恐れながら能あたるは賢慮けんりよ廻まらされ、何卒なほとままり下くだされよと、身みをへり下くだる源八げんぱちの、下郎げんらうよおしき忠臣ちゆうしんなり、理ことわりで有あるが非ひで有あるが、貢之介みつぎのすけが言出ことせし詞ことばの直ただくは繪言えいげん同然どうぜん、無益むえきの

諫言不届やつレ傳内引立い、畏つたと傳内が弓手を取て引立れば、斯
は諫言やからい、いつかなく、愛り動ぬく、御上意背くらづ虫め、命
の暇をくれんすと、ひらりと切り込刀の稻妻、其儘たぐつて突飛せば、瘻
ず脇差打かくる、ひはらを丁どたちく、倒るゝ傳内せき立若殿、刀ひ
らりと源八又、切込給ふ其手を持、金言り耳よさかい、良薬の口よ苦しと
古人の詞、今眼前見へたる善悪、个程の事の辨へなきり、さて理よ暗き大
馬鹿殿とあく迄、雑言短慮の虫、いらつて切り込む御太刀を、あしらひ兼
て源八が、逃るをやらじと退ひ給へば、是りあぶないくと三人續て、退
て行讃岐の國主、滯留迎幕打はへし湯本の宿、座敷のはいばん狼藉よ敷
三味線、將基盤所目なれぬ金屏よ書く異國の山水より庭の、築山かのれ
儘、笥の水のとらくと物凄社聞へけれ、源八の漸と逃る湯木の庭の面
見廻す傍の柴垣よ息を詰てぞ忍び居る程もあらせず若殿の留る面よ

踏退け蹴退けせき込短慮も眼も血走り源入の何國もある返せく
と齒を喰えめ心のはやり給へ共は息切て庭石は身をとつかと座し
給ひ誰か有水を持て早くといら立ちの仰は氣轉の其朝が銀の
茶碗は筧の水湛て直ぐよさし出せば其儘ぐつと呑ほし給ひ心ゆるめ
バがつくりと氣力折れ其風情とつくと見濟し民谷源入づかくと
立出てくいづれも悦ばれ殿のは短慮今日只今御全快有たるぞと
呼ひる聲は近習の武士龜次郎野風傳内も追くよ欠付てこい
かよと尋れば源入よつこと打笑ひは不審は尤此度大殿は死去の
跡鎌倉の武將を嚴命下り若殿は跡目相續有てお國のかいらす万歳
と歎かへて一家中御領の百姓町人迄悦び勇む其中は情なき殿の
は短慮此頃殊も増長して御氣は違ふ面々の皆は手討あへなき最期
君の爲め死す臣が命誰か其身の惜まねど斯は短慮増長せばお家の大

事と色とよ、は保養すしめ奉れど生得藥を嫌ひ給い、只一口も召じ上られず、いかいのせんと家中の歎き、は藥だよ召上られなば忽本服有べしと、典藥衆の詞より存付たる源八が、一つの術を隱密に内記殿と心を合せ、此度此地へは入湯、足輕風情の身を以て殿へ具斯不禮せば日頃の短慮増長して、追欠給ふを逃げ廻り、は息切れの折からよ、定めて水を乞給いん具斯せよと其朝へ、云付け置し、我計らひ、笥の水を呑し、直に心せいくと、平快なしたる我病、不思議、其義の内記と合せ、良藥笥に仕込置、短慮の根を斷藥の加減、適、小身者よは健氣の働き、譜代も及ばぬ忠義の程、いか斗り嬉しひぞよ、有難きは詞たどへ小身なる逆も、は思ひ、かいらぬお家の爲、下郎の身として慮外を働き、不禮のは免下さるべしと、低頭平身源八が始て明かす忠臣の實類なく聞へけり感ずる人よ若殿のりんせんたる氣色よ、天晴忠臣其方こそ、我

爲の耆婆扁鵲其恩賞よ何なり共、褒美の心よ任すべし、いざ望め
ど忽も打てかへたる優美の詭誕、源八はつと平伏し、有難きは仰、君は
全快なし給へば此上何か望み有べき、只源八が願ひ、秘藏の鶯取り
放せし龜次郎殿野風殿二人の龜忽を免有、何卒助け給ひらば生る世
この情けと、人を助る仁者の願、聞くより傳内えやえやり出ならぬ
く、太切ある鶯を取り逃せし二人の命、乞請る源八も一つ穴の道樂仲
間、其朝が随ひぬも源八そちがちへくつて、小悴迄孕んだ事、最前ち
よつとつないで置た、儂も同罪遁れぬと、ひしめきかゝるを押留給ひ、
待て傳内渠等を手討と言たるの短慮の虫のなす業、よて、貢之助が詞よ
あらず源八が願なくとも二人の命の助け遣はず、まつた夫なる其朝を
源八と深き中と知りながらも、某よくとき落せとすしめたる傳内が所
存の程いかよしても心得ぬ、夫れに引きかへ其朝が我詞よも随はず足

輕ふぜいの源八も誠を立る志其心底を感じ餘り身請致して今日も
源八が宿のつま其バいかいの岩代傳内能計ひ得さすべしと仰をも
どく岩代傳内は奉公の身を以ては目を掠る傾城狂ひは咎も有べき所
かへつて身請のせんさくの餘りでうま過ぎる何ぼ殿の上意でも
个様な事を計ふては家老中々後日の咎が恐しい此儀斗りのは辭退と
詞を工みよ言ひまくれれば若殿は氣色損じ給ひは口がしこきけつばく
顔理非の善惡貢之助知らで政道立べきや人を讒するそちが所存屹度
吟味の有やつなれどそこを赦して此バいかいす付るの情の掟たゞし
とつくり洗ふて見せうか其儀は急いで身請の一母致せよ何
源八汝が器量を感じ故今々武士も取立る則知行五百石其分皆々心
得よと言捨奥へ入給ふ寛仁大度のは捌悦ぶ人々傳内もふせうと
立上り打連てこそ入る跡を源八の打見やり嬉々や忝や若殿の短

慮のは病氣全快なしたる其功と言づがたらず其朝を身請のは恩忘れぬお情まだ其上よお取立、有難、は禮参りの箱根の權現、一一走参つてこふと、出行向ふへ一對の、奴が振出す水手桶女房呼た川へはつ込く聲も揃への伊達襦袢、はらくくと源八を中又圍ふて追取卷き、殿へは乘進めたるは褒美として其朝を、宿の妻との頼政増り、五月雨ならぬ春雨は池のまこもの水あびせ、ひいやりお祝いさんと、前後をさへへつゝ立たり、源八ふつと吹出し、どなたのは意か知ね共、まだ祝言もせぬ先よ、水浴どの早い手廻し去ながら、折角のお祝ひを請ぬも不禮今後でさつぷり浴て見せやそふ、は用意能ほど二王立、合點かど双方よ、さんぶり打水身を引源八、互よすまたの濡男、兩方一度又組付を取て寶菜土器投、又こなたを打かゝるみづし黒棚人礫、片手摺よ、一投付けられ、打すへられてさんく九度、叶ぬと一同立ちり、ばつと逃ちつたり、今

ぞ花咲源八が、古郷こけいの曠はれび着錦の袖、桃ももと櫻うめや春の野のと花はなの、かんべせいさ
ぎよく勇ゆういさんで

○第二 八幡普請場の段

〆く騒さわがしい、玄まづまれく、此度國府八幡宮やまのは造營ぞうえい首尾しゅび能出來ゆきと付
明日勅使たつしお入の上、和歌一首奉納有るが丸龜家けの吉例きちれい、滯とどなく相濟あいきだる
は褒美ほびとして、青銅拾貫文大工日雇ひやうの仲間へ下さる、有難く頂戴ちやうたい致し、早
く歸かへつて、休息きゅうしせよいけく、アハハ有難ありがたふ存ぞんじます、何なにと皆みなの衆しゆや、手間代
の外拾貫文のはほうび、おらが仲間へ下さるといふ、有難ありがたひ事ことで
ないか、是こゝといふも傳内様でんないさまのお執成とつじやう、一ひとたい、あなたのお胸むねが廣ひろふてお
心こゝろが大きおほうておして、お慈悲じひ深こゝろいからじやない、空兵衛殿くうべゑだん、又
大きいといへば、今度江戸の茅塲町かやばから金毘羅様こんびらへ上あつた鳥居とりい、見事みごとで
立派りつぱで大きおほうて、金かねのかゝつた鳥居とりいじやときつい評判ひやうばん、傳内様でんないさまのお心こゝろと、

同じ事じやと追従たらふ、騷がしい早く歸れ、御祝儀の此錢を
隠もも見せて慨バそふ、有難ふござりますと、てんで青銅さし荷ひ、
我家へ立歸る、かゝる所へ立派の侍、深編笠又顔かくし、のつさく
と出来る、兄がそぶりの心得ずと、跡より付いて龜次郎、小影又忍び聞ぞ
共、知す森口傍へ差寄り、傳内殿、森口殿、何ぞ用の、先達て申さ
れし飛札の面又違ひ、かく肝入りの萬兵衛とやら、いよく到着致せし
か何とでござる、夫の氣遣なされますな、則今日此所まで、何角の熟談
致す筈先、夫々の鎌倉を使者の立たる其趣、我も夫のみ心よかゝり
密に窺い聞く所、此度鎌倉の武將、專武道を好み給ひ、此讚岐も聞へ有る
某民谷兩人が、武術の譽隠れなく、兩人の内一人を、差下たせと有る内意
の使者、夫と明かし給ひぬ、深き賢慮の有へき事、貴殿も兼て知る通り、
三年以前箱根も、おいて若殿の短慮の病、本服させし足輕の源八、俄立身

某と肩を並ぶる其きつくぬい、方が一今度の發足源八めと上意下らば、此森口が一世の瓊瑾何卒渠を退退け、願を立て鎌倉の武將へ近寄物あらば、夫から取入る仕様のさま、幸い明日勅使の下向其席と於て源八と耻辱を與ふる豫ての工み、此術や合せの彼万兵衛早ふ逢たいくと、せき込森口龜次郎の、聞度と胸どきく、兄の非道の悲しやど、先非を悔て泣居たる、傳内の立上り、尤もく、左様ござらば若間違普請場と待たんも知す、拙者のちよつと見て參らん是で暫くは待と、云い捨てこそ急ぎ行、跡又森口手を、拭き工夫又小首傾くる、兄者人は何してござるぞと、聲かけ出る龜次郎驚く森口さいらぬ体、誰かと思へば龜次郎けたしましい今の呼様、思はず悔りえたの、こなた様の悔り、此龜次郎が悔りの、どのやうと有ふと思し召、合點いかぬか姿故、跡から付いて何も角も、どつくりと聞きました、今四國と誰有て、並ぶ方なき森口

源太左衛門、有難くも殿の師範夫又繋る我と迄、は知行頂戴仕る、殿の
思ひ須彌大海、其目鑑よて取立の源八殿を退退けんと工みの段
段、人の出世を嫉給ふの器がちいさい、今鳥の翅か雨の腕といづれ劣ら
ぬ森口民谷、其民谷殿を失いんとするに、コレ大恩有、殿様への大不忠、今の
様な悪事の相談、他人の耳又入るあらば、は身の災遠かるまじ、私が聞い
たるに神佛の扣へ綱、何卒は心ひるがへし善心又成てたべ、肉身の弟が
若輩なる身を以て、は異見すすもは身の爲、聞分けてたべ是すと、わつつ
くといつ手を合せ、血筋顯はす眞身の涙理り、せめて道理なる、森口態と
まはるゝ顔色、またり、持つべき物の兄弟、まやな、今其方が云ふ通り、人
の立身出世するを嫉み妬ひ成程少さい、そちが切なる眞身の異見、刀よ
かけて聞届た、何ア、數ならぬ拙者めが、只今の諫言を聞入下さると
な、何よも云ぬ、誤つた、其かありぬ此座切、何事も穩密く、

コリヤお開届下さるか、忝い、まそふ有ふ、能く思ひ廻して見れば、
そちといふものなきならび、いかなるうき目よ、こわやの、是も一
重々氏神の加護、八幡宮へお禮参り、そちの是方館へ歸り、明日の勅使
のお入り寶の硯のそちが預り、吉例のかけぬ様、心を付て合點か、委細
の明日龜次郎、さらば、と和らか、善と見せたる森口が、工みの底の
深編笠、兄弟左右へ別れ行、傳内の待合す、万兵衛引連れ立歸り、傍り見廻
し、コリヤとふ、まや、今迄爰に居られし先生、待兼ていづれへと、尋る内、傳内
が、落ちる帛紗拾ひ上げ、開いて見れば、みと簪、是野風、龜次郎へ送り
し、艶書、能物が手に入たと、慨ぶ後、源太左衛門、兩人共、待兼しと、云
つし、小陰を立出て、傳内殿、最前貴殿との密談、残らず知たる弟、捨置
て、後日の仇、追退ける其工夫、明日勅使の下向を幸、渠が預る寶の硯
人知らず盗み取科を負せる、働きの、案内知たる岩代傳内、心得たるかと

詞の下、夫よこそ最究竟、今拾ふたる、此一品開ひて見れば、野風が簪、今一色の送りし艶書、是を證據、松影の硯を盗んで重る科、是よ手間隙入らね共、六ヶ敷のハ、源八、夫こそ兼て示し合す、箱根よおいて其方が、預り置たる證文、是へと云よ心得傳内が、紙入明けて取出す、一札取て押開き、此證文の十年と印した上よ、二の字を加へて廿年と、傍りを見廻し、矢立の墨、十の文字よ二を加へ、是で年季の廿年、一旦濟だ身請の諸塚、只一筆で源八よ、恥辱を與ふる工夫の何と、適妙計、万兵衛が福徳の三年め、此證文を役よ立、其朝を引上て、松坂屋よ吞込せ二度の勤の年季金、たつぶりとわたしまらば、傳内様と山割、大きな聲ぞや、夫をおどりよ、勅使の下向、満座の中で源八よ、恥辱を與ふる働きの、肝入り、万兵衛合點か、夫のぬからぬ去りながら、源八よ其朝が中よ、小悴が有ると聞けば、ちかつよの渡すまいと云よ、傳内何さ、是非渡さずば、其朝が脊丈の

金を積む身請と難題を云いかけて、引分け逝るが肝入の心を悪ふ必ぬ
かるな、コリヤ聲が高い、委しき事、身が屋敷、兩人來れど先ふ立、悪ふ茂りし
森口が、木蔭を頼みふ打連て、屋敷へこそい

○第三 丸龜館の段

「急ぎ行讀岐の國丸龜殿の館より、國府八幡造營の古例に任せ都より、勅
使下向のもふけ、迎御臺所生駒の方、和歌の工みよお心を苦しめ給ふお
傍より、曲輪放れて其あさが今、操と替る名の、昔を忍ぶ生け花の手際
み、花をや咲せける、花生是へ、操の會釋し、今日、御勅使へのもてあし
迎三十一文字の、工夫、あんまりお氣を誥られて、おまづらいでも出ぬ、
様よと、見事ふ咲た櫻花、此花をばらふじて、お氣をおはらし遊ばしませ
不調法な花の流儀も時の一興、お笑ひぐさ、おはづかしやどほのめけバ
生駒の方筆をと、め、やさしいそあたの心ざし、取り分け見事な此花

の名の薄墨うすすみのうすからで、雲井くもいの庭にわもさくと聞き花形はながたもませんとこと替かり、花物はなもの云ねど自みづから、心こころもはれて一入いちにゅうも此こゝ、水際みづぎはの如ごとくぞや、田舎いなかも育そだち身みながらも、けふ稀まれ人の饗應きやうおうを拙つたき筆ふでの口くちずさみ、手爾葉てにばの程ほども覺束おぼつかないど、女同士にょどうしの主従しゅじゆうの中なかも和らぐ折ひづからも出仕でしと披露ひろうし森口もりぐち、民谷たみや、武術ぶじゆつの聞きへ隠かくれなく心こころも劔つるぎ振りあへど、表うらの柔和にやわの作り花はな、杜若かきつばたの一本ひともとを、携たづへ出る源太げんた左衛門ざゑもん、こなたも菅浦あやめの造つくり花手はなても持出もる民谷たみや源八げんぱち、見合みあひ互たがひの顔かほと顔かほ、此こゝ前まへと見るを、押下おしり、席改せきむれば源八げんぱち手を突つき、誠まことも今日けふの此こゝ、勅使てうし、中納言ちゆうなごん有房ゆうぼう卿けい、吉例きちれいも任せお家の重寶てうぼう、松影まつかげの硯いんを持もて、八幡宮やっぺんぐうへ奉納ほうなうの和歌わが一首いっしゆ、下したし置く、が當家たうけの吉例きちれい、其硯そのいんの預あづかり、森口もりぐち殿とのの舍弟しゃてい、最早さいぜん出仕でし召めいされたか、あ、いかにも同道どうだう致いたしてござる、則すなはちお藏くらを開ひらきもふけの用意ようい、勅使てうしお入りも退付たいけあらん、夫々それぞれの先まつ生駒なまがまの方かたへ、森口もりぐちが一つの願ねがひ、判断はんぱん下くださるべしと、扇開あふひて杜若かきつばた、此こゝ前まへも直ただち座ざを下くだれば、同どうじ

く民谷源八も菅蒲の一本押直し遙下つて頭を下げ、恐ながら源八がは
願の造り花、いづれあやめのははんだん、偏願奉ると、同じ訴訟の花の
謎、どふ云ふ事と女房が脚手は迷案に顔生駒の方、杜若手は取り上て
打詠め、花は准へし、兩人が願の筋、杜若花あやめ似たりや似たり色艶
は、紫を賞美する、其染色の江戸紫、東發足の願じやの、恐ながら通
のははんだん、此度鎌倉武將の下知によつて此鬮岐、武術の聞へ有べ
き者を撰下すべしと有、お使者の趣、武士の譽れ此時と、思へど叶ぬ主
命も、八幡宮のは造營、首尾能相濟む上よと、今日迄扣へしが、御普請も
成就の上から、何卒武將へ御目見へ暫くの御暇乞、殿様へ御取成、希ひ
奉ると、恐入たる平伏の胸の一物見て、取源八あやめの花、森口殿の願
ひと一對武將へのお目見へど、武運も開く花の謎、聞届下さらば、身
は餘りいか斗り有難く存奉ると、詞の先折源太左衛門、何源八殿、ちと

お扣へなされ此お願の某が最初でござるぞ、夫は格別、此度武將より當館へお尋有るの、武藝の達人、お腹は立てられな、足輕よりへあがり、漸どけふ此頃の、立身のそこ許、どふやら拙者などの、心元なふ存る、此森口などの殿の、師範とす、四國の内、誰有て、相手、成者がござらぬ、大方今度の、所望も、名のおさし、おされねど、某が事でござらふ、くそりや、森口殿餘りなる、廣言、尤殿の、師範、なされるれど、武藝の、銘、武士の、嗜、二合半の、下司、下郎も、武術、鍛錬なる者の、有まじき、共、すされず、又四國の中、誰有て、貴殿、又續く者は、いと仰らるれど、夫、彼井の中の蛙、同前、畢竟、大海を、存じない、と、物、左様、又、高慢、お義を、仰らるれば、自然、と、殿の、名、の、出る事、コッ、ちと、お嗜、なされたが、よふ、と、ござらふ、成程、一、と、尤、民谷、殿、何が、彼、常、か、心、安、き、と、任、せ、不、計、す、た、事、が、は、氣、よ、障、り、何、共、迷、惑、仕、る、幾、重、も、は、宥、免、殊、又、蛙、の、譬、猶、以、有、難、い、ま、か、し、纒

の生類なれ共、大海を知つたか知らぬか、心見の爲そと、お目も懸ふか、
見事某も、おんでもない事、望なら今成り共と、互も刀も手をかけざりし
く、と誂め寄、操聲かけ、よく、前と云い今日は、大切な勅使のお入
り、殊もお願ひの筋も分らぬ内、無益の争ひ止まえて、響應の差圖が、よ
からふ様も存せする、夫も互いの中よふ勅使のもふけ、願ひの品も聞
届けた、近く菩提所志渡寺において、劍術の大會有る其砌、森口民谷兩人
立合、勝たる者が鎌倉の武將へは目見へ、東へ發足、お聞届け下さる
る、違ひぬ證據に此花と、櫻の二枝差出せ給ひ、花の三芳野人の武士、末世
も残る名こそおしけれ、心得たるか兩人と、仰も二人の押戴き、忝きは
意の趣誠の花と造花似せ、紫は森口が譽を今も東の門出、櫻の花も顯
る、民谷の流儀を森口殿、互も勝負の甲乙が願ひの叶ふ腕だめし、お
くれを取るか譽を取るか、夫迄の奥へ來て、響應鹿畧なきよふも、委細承

知仕る、そんなら一所よ、おぢやど、笑ひを舍むかほよ花手よ携へて立給へば、森口民谷の式禮目禮心の内、八重一重、九重句ふ櫻花、勅使もふけと兩人を連て、一間へ入給ふ、操の跡を見送りて、森口の憎體な、女のわしさへ口惜い、夫のそふと坊太郎、けふの嘸かじわやくいやらふ、いつそ今朝から乳母諸共、連て來て休足所よ、留て置てもよかつたよ、此乳のほりを一嚮吞せて來たい物ぢやがと、子を憐むの奥様もかつきの海士も、かいらじな、折から表よ、泣子をばすかしかねたる乳母お辻懐みだく胸たくく、勝手ぢら洲をうろく、顔操の夫と見、乳母、そなたの爰へどふしておぢやつた、奥様か、もふくくどふして所ぢやどざりませぬ、お前が是へお出の跡、ついにないおむつかり唄様、くと跡追ふて、やんぢや斗りおつぢややる故、だましてもすかししても、乳を上げてもいかな事、せんぼうつきてお館へ來事、來ても勝手の知れず、尋迷ふて漸

と、お目よかすつて重荷おもいがかりた、サア、くいと様嬉よろこしいかと、懐出よこしせば手を
たしきよねんない子を抱かかり取り、坊ぼくかいのく、よふおぢやつたのふ
く、わしもけさから、よつ程あんぢて居たのいの、坊ぼく乳をたんとたべ
てから、又乳母と行て庭の花、折てもらやと撫なさする、子よ、目のなき
風情なり、勅使のお入りと知らずる聲、胸むねり驚おどろく乳母お辻つじ、子を抱き取れ
ばかゝ様と、泣なり引るゝ後髪うしろがみ、又振ふりかへり母親が、あゝする片手、又櫻花、一
ふさちぎるも身の上と、えらで我が子の手、又持たせもて、く花の、えいの
く、サア、此間こゝも、ちやつとく、心得乳母お辻つじ、く花じや、く花ぢや、花
が見たくバ吉野へござれ、今、吉野の花盛りも、くそちらよ、こちらよと、
すかしながら、又奥と口、別れの始め花ぐもり後の「哀と知られられ、程な
く、勅使の御入りと、さゝいめき渡る表の方冠かむりの紐ひもの長廊ちやうどう下東帯ひもとけだ、かさ
中納言有房ふさ卿きやうえづつと、と入り給へ、バ、臺たい所生駒なまこの方、森口民谷岩代も

出迎ひの式おごそか各敬ひ平伏す、有房仰出さるゝの當丸龜家の格
式しきの古きをもつて新あらく、國府八幡造營ぞう又和歌を捧さしげる吉例、用意よくバト
くくど、仰うやハット、生駒なまこまの方古例あたらしいとのやがならはるゝのげ下向げかうの家の
譽國はまの規摸きぼ、貢之介きんすけも早速はやは出迎むかいやす筈はずなれど、不快くわい又よつて引籠罷
居まりますれば、恐おそながら名代なしろの此生駒なまこま不束ふとのゆる赦ゆるし下され、天氣宜よろしく
は取成偏ひとこ又願上ねがますと、會釋あひやくも遠武家とんぶけ育實丸龜よくじつの奥床おくどし、早刻限はやげんと龜次
郎らう、硯えんの箱はこをうややく敷ふ、勅使ていしの前まへ又直ただし置おき遙末座はるかばつざ又手をつかへ遠路えんろ
のげ下向げかうは苦勞くろう千萬せんまん、私義しぎの森口源太左衛門もりぐちげんが弟あに同苗龜次郎どうなむらとや者もの預
り奉たてまつる家の重器てうき松影しょうえいの硯えんは改下あらたさるべしと、上あれば有房ゆうぼう卿結けいひし
紐ひもをどくくど、明あけて恠あはれ驚おどろし給たまひ、ヤア硯えんが、いかゞ致いたしました、ソ立
寄よて見みられど仰うやの下、岩代傳内いわしろでんすつと寄より見みるゝ態わざど仰うや天顔てんげん、ヤア是こゝ大
切たいせつな硯えんが紛失ふんじつ、ヨ、いかよと驚おどろく人ひとと龜次郎きんじらうの氣きも狂亂きやうらん走り寄よりて寶

の箱を打かへせば、中々出るみ一通、見る方傳内コト何ぞや、寶寶の箱箱又なま
めいた女のみしかも、簪かんざしが巻込まきこいで有ヤ、其みいと立寄龜次郎取て突退け、
何ぞや態わざと文しては様子やうすといせ、別れ程經てはへ共いよし其
儘に入らせしや、數々かずかずかまほしき事こと又存じ上うへ、跡あとの讀よみ又及およば
ぬ、艶書宛名は森口龜次郎宛へ松坂屋内野風宛、龜次郎殿、何か大切
お家の重寶松影の硯を賣代うりしろなし、傾城けいせいの揚代やうだい又遣はたひ果して仕廻ふたの
か、ア、全く以て某まい、エからば又盜ぬすまぬといふ譯わけけでもござるか、
何とでござるなど、問詰つめられて返答へんたうも云譯何と差真さしちまく、こらへ兼て源太
左衛門、龜次郎が袴はかま髪取かみとりてぐつと引寄扇よこの折檻せうかん丁ていと骨ほねも折れよと打
すへく、ア爰こゝな人非人ひとひの不届者とどろめ、其方が預りの松影の硯いか、代と當
家の重器てうきとして、國府八幡造營ぞうの吉例きちれいをかき、不忠不義なる色いろ又迷まよい酒
又長じ、遠國隔へたて、艶書えんじよの通路つうろ傾城けいせい遊女ゆうにょの揚代やうだい又賣代うりしろなせしな、傳内の詞

又違ひず、云譯立ぬ證據あれは其身の落度科の遁れぬ、覺悟せよ眞二つ
又打放すと、刀の柄又手をかくれば、其手をえつかと、源八殿コトヤなせお
留なざるし、イヤヤ譯けぬ尤ながら此所で血をあらさば、勅使への恐ど
いひ、不淨を拂ふは家の吉例科の掟ぬ殿のは裁許、私の計いよあらず先
暫くお扣なされ、差當つて和歌奉納の儀ぬ、は勅使様のは惠み偏ぬ願ひ
奉る、イヤ其義ぬ少しも氣遣有るまじ、自餘の硯を松影の硯と名付け、今日
の吉例和歌奉納の上よては、公家と武家との政事ぬ格別眞の名代生駒
殿何とそふはおぼさぬかと、道は長袖温和の沙汰、生駒の方ぬまどやか
に仰又違ひぬ此場の時宜、人の命ぬ萬寶の隨一と承られ、器物のか
りよ無益の殺生、龜次郎其方が此度の越度切腹も及ぶへきを、は勅
使様のは慈悲を以て、命を助け長の暇を遣ひず、大切赤寶の硯草を分け
て尋ね出し、再びそちが手よ入らねば、又の歸國も叶ひぬぞよ、源太左

衛門能又計へと仰を聞ふ森口のずんと立て龜次郎が大小もぎ取椽先
を、白洲へどふと踏落し、不忠不義の其方なれど、お情け有てあほうばら
ひ、此大小の殿方の拜領なれば、穢れた腰より勿躰なし、ソレぼつばらへと、
差圖も否も退立てられ、不時の難義も主従の今ぞ名残と見かへれど、硯
の海のそこはかど浮木の龜や龜次郎、三世の縁も夢の間や、惜かひなく
出て行、中納言重て、時刻うつれば神前へ奉納の和歌認めん、奥方案内と
立給へば、お傍の小性附より奥殿さして入給ふ、かゝる折から此門の方
下がれくと下部が聲く、遠慮會釋も悪者作り小腰かゝめて白洲の内、
くくお願の者でござります、く、さ見れば町人の身を以て、高家のお入
りも氣も付す、つかく通る不敵奴誰がゆるしては前問近く、上を恐れ
ぬ慮外者、ソレ引立よと下知の下、はつと立寄る下部共、岩代制して待と家
來共、何源八殿左様もあつゑやるさ、は勅使の出入と知て願ひどの殿の

お爲か家中の非道を訴へるのでござらふ。町人め先其方が願といふの何事ぞや。くやせと兼ての仕組和らで問ひ地も鼻付けて、願とやの別の義でもござりませぬ。私に江戸表三田の臺町とや所も居ります。山城屋万兵衛とやて奉公人の肝入を仕りまするものでござります。則ち私が口入よて品川宿の松坂屋へ子供の折から遣しました其朝とやまする奉公人三年跡は箱根の湯元で民谷源八様とやすか侍が身請の相談、まかも丸廿年七百兩の奉公人を金子三百兩の内取よて跡金のお國にお下し下さるは約束でござります。根が丸龜のは家中とや殊よ其節は立身のお噂故何事も呑込で上げました所假初よも三年が間なしも礫もござりませぬ。故遙くの所態に登りませたまも奉公人が申請けたさ、いとふぞお慈悲よ此方へお戻しなされて下さります。様よお願ひや上ます。町人其民谷源八といふの身共が事成程今其方

が申通り、三年以前箱根において殿の御見出しも預る、立身出世の其掟
申かひせし妻の操、殿々身請なし下され宿の妻も下さるゝ、其ばいかい
の夫もござる傳内殿のお取捌き、其節承りれば九十年を七年勤残り三
年三百兩の約束もて身請も相濟せし様子、何事も傳内殿貴殿のお取
計ひ、此義のいかゞでござる、イカニモ其節箱根において殿様を出ましたる、
金子と申の三百兩、只今渠めが申通り、九廿年七百兩の奉公人を當金三
百兩相渡し、跡金四百兩の其元お國へ着次第は下しなさるゝ約束でござ
つたが、未其金子の相濟ませぬか、コレハ、歸國致して早三年武藝のはげみ
暇なく、彼是と取紛れ其後お尋も申さなんだ、コレハ、何共氣の毒お物でござ
る、スリヤ、耽と廿年七百兩も相違ござらぬか、左様でござる、違ぬ證據の
探殿の年季證文がござる、ア、今様な事も有ふはしか、今朝入用の物有て
書物の箱出しましたら右の證文、コレハ、民谷殿の御内室操殿の年季證文、

又何角入用の事も有ん、貴殿もお渡し申さんと幸持參致した疑ひしく、只今證文お目よかけんと、懐中の紙入を取出す證文、コレは覽なされ、此通り太鼓程な判が押してござる、まかも廿年の年季證文、書た物が物を云とやら、此證文なくてござらふじろ、拙者貴殿へ一言の申譯けがござらぬ、扱ふ能物が手よ有て拙者が潔白、仕合なやつ、万兵衛とやら、コレは覽なされ源八殿と、差付ける證文、拵へ事とかもへ共今更何と詮方も妻の操を呼出し、女房、定て様子、聞たで有る、其方が身の落着、源八が一期の浮沈、此一札も違ひなく、丸廿年の約束で、身請けの高も七百兩も相違ないか、とどふじや、成程最前々の有増を聞けば、聞程、此身の難義、稚い時、身をしめ、委しい様子、存じませねども、残りし年もさつはりと、里の苦患を遁るゝ身請、嬉しい月日もけふの今、ふつて溜たる此場の難義、こりやまわす何とせう、とどふぞいな我夫と十はうよくれし其風情、万兵

衛の仕濟し顔何と證據といふ物の争はれぬ物、其朝を早ふ請取ま
せふかい、そりやならぬ、又なせよ、されば、殿より下し置かれし女
房なれば、うかつ又渡せば源八が武士が立ぬ、イヤ立も立ぬも書た物が物
を云います、いな、何ぼう殿様の作意でも、證文を反古よの成りますま
い、但し爰で埒が明かねば、謙倉の作前へ出て願ませふか、イヤ夫の、くど
ふでござるとせり詰られ、さしもの源八返答も、さし真て居たりける、弱
身へ付け込む肝入萬兵衛、所詮埒の明かぬせん、さくじや、其朝とい
と立上る森口聲かけ待、町人、最前より始終の様子委數聞、廿年の奉公
人をわづか三百兩で根引又致され、作國へ同道なさるゝ様な源八殿で
ないわい、是よ、何ぞ間違ひも有ふ、何のとも有れ證文是へと、云よ心
得傳内が差出す一札、手又取り上逐一讀終り、是丸廿年の年季證
文、此一札の表では万兵衛とやらがすす所至極尤、民谷殿の作不念と

見へます、いかゞ殿の注意なれば、迎、どくと實否も糺し召されず、輕はづ
みある身請けのあされ様拙者など、いまだ江戸表へ下りし事もござ
らねば、土地の風俗に存せね共、音も聞へし新吉原、大小名の入込、よて全
盛なる傾城も、數多の事と承はる、傳内殿夫も相違はござらぬかな、いか
ども左様傾城の道中、突中の町から五丁町、見せずが、いさきの賑い、さやは
やもふく、どふ共こふ共たまつた物で、いさざらぬ、そこでござるて、民
谷殿の御内室、みさは殿も、其吉原も全盛の太夫職と存じたが、今證文の
表を見れば、旅籠屋の宿引女、飯盛の様も相聞へます、是も違ひござら
ぬかな、成程、品川とす所の江戸の入口、登り下りの宿を致す旅籠屋
商賣、一夜流の契り賣、飯盛女も相違ござらぬ、民谷殿の御内室、操殿
も、いよしへの品川の飯も、り女か、左様、飯盛、誠はや譬の通
り、氏もふて玉の輿、萬座の中で御内室の素性顯れ、近頃笑止千萬も

存る、たゞとあざ笑ふ兼て意根の憎手口胸よこたへて民谷源八何思ひ
けん立上り探が手を取白洲へ突出し女房さつた、ト何驚く事が有、長
の年月馴染し其方饗飯盛下女婢乞食非人の女でも源八が性根を見込
妻と定し上なれば恥辱もいとぬ殊も以て殿様々下し置かれし其方
なれ共一札を反古よして政道にくら閨殿の匿名を穢していと差つ
ど無念を押包む身が心を推量せよ傳内殿の取計ひ定し如在有まじと
打捨置た某が不念今更云て益あい事未練殘さず早お行きやれと事を
分けたる夫が詞聞々わつと泣出し思ひがけないけふの時宜きのふ迄
も今朝迄も民谷の妻と敬りれ子迄なしたる其中を引分けられて恥し
い二度の勤の憂苦界お前や私先生の先生から定る因果と諦めても居ませ
ふが可愛いの坊太郎けふも限つて跡追ふたのも虫が知らした親子の
別れまして遠國隔ていつ逢ふ事もならぬ身の果報の薄い子と思へ

バ、わたまや可愛く、と人目も恥ず伏轉び聲をも立す泣居たる源八も女房が心を不便と思へ共態と勵す聲あらしげ聞分なきよまい言いよしへの兎も角も一旦の源八が女房なれば武士の妻、未練の操言不吉の泣顔、太切なは造營妨有ての不忠と成るが、そんならとよぞ我子の顔達て聞分け有ざれば未來永々縁切ふか、夫の知ぬ昔と謠よと睡よりはらふ血の涙萬兵衛の氣強くも、源八様とやらが心得心され泣いた逆悔んだ逆證文の面だけの勤ねばならぬ大法、見ればお公家様のお入と云い、時代お所で身賣のうれい、勝手が違ふてこいつのあかし、いものまや、本よまだ斷つて置く事が有る先達て請取た三百兩の、是迄ほつて置まやつた三年が間の揚代、一年よ百兩づゝとの近頃下直な物なれどお馴染がいよまけて置こつちの金箱其朝様、お出と引立る、暫くと奥の間も、立出給ふ生駒の方、民谷夫婦よ打向ひ最前より

始終の様子われもて聞、思ひ寄ざる操が難義倦ぬ別れも源八が殿の
名を汚さじと、耻辱もいとぬ忠義の程感ずるも餘り有操も不便も思
へ共、折悪敷殿の所勞そなたの不運、何事も自が胸も有主従の縁わら
ば又逢ふ事も有程も随分其身大切も兎角時節を待て居や、情も厚き三
世の起縁身もまみ渡る有難涙只伏拜む計もて暇乞さへ泣顔を包み兼
たる別れの涙是非なくも出て行、折から聞ゆる、管弦のまらべ和歌
奉納の時刻ぞと、中納言有房卿、まづくと立出給へば、生駒の方こなた
も向ひ、源八、其方の國府八幡へ見送りの警固中付る、源太左衛門
傳内の殿へ此由中上よ、勅使様、神前迄は供中奉らん、いづれも太
義くと云捨て悠々然と出給ふ和歌も和らぐ神の國壽き長き短冊の
此代を祝する生駒の方、民谷源八は供もて八幡さして急るも、傍り見廻
し岩代傳内、森口が傍も立寄、何と先生は舍弟を仕廻て取り硯の紛失證

據の筈、色みの讀方迄まんまど首尾能嘸お悦び、されば、大事を知た
弟め、情と見せて此國を退放すれば氣遣なし、兎角邪魔なり源八め、左様
でござる、足輕を經上つて立身出世が胸わるく、取て置たる年季證文禍
も三年め用ゑ立たる肝入万兵衛、渠めが働きた十の字の上ゝ二の字を差
加へ、まんまど耻辱の與へました、此年月ためし見るゝ渠も民谷の
流有て中ゝ手強き手練の程、近日當國志渡寺よて、劍術の立會有則ち、勝
負ゝ勝たる者東へ發足ゆるさんと有る奥方の仰若、其席よて某不覺を
取らば、未代迄の大笑ひ、武將への目見へも叶はず兼ての大望水の泡、
斯くど耳ゝ口、勅使見送りを幸ゝ、一味の門弟駈集め待ち伏せまて
源八めを眞つ二つ、出合所の國府八幡道の一筋必ぬかるゝ早急げ、か
しこまつたと身纏ひ、出行岩代森口の、何角心ゝ一思案跡を募りて、追ふ
て行爰を國府の八幡宮造營首尾能相調ひ、神すゝしめの夜神樂よいと

い、心耳しんみみぞ澄すましける、勅使しやくしの見みおくり相勤あひまかめ屋敷やしきへ急いそぐ民谷たみやが乗物のりもの先まへを照てらせ箱灯はこぢやうちん燈あかり、いづくもか顯あらはれけん灯燈あかりあかりバつたり切落きりおちせば、狼籍ろうせきといふも早く拔連はくれんく、切結きりむすべど暗くらさのくらし前後ぜんごをぼうじ、いづく共なく皆みなちりく、當途あてどもあしよ退ひふて行跡ゆきあとも残りし乗物のりものの戸かどを蹴放けはなして民谷たみや源八げんぱち、すつと出たる身み繕つくろひ、鳥居とりいの影かげも森口もりぐちが顔かほを隠かくせし頬ほかぶり破やぶ羽二重はふたじゆうを七しちの圖ずまでぐつとどからげて刀やいばの目釘めくぎ、えめすも知らぬ眞まことの鬪たたか油斷あぶらたぎならざる源八げんぱちが股立ももたち高く退ひつ取りながら、何者なにものあれば、かゝる狼籍ろうせきなせ尋常じんじやうの勝負しょうぶのせぬ比興ひけい未練みれんの働はたらき、聞きへた日頃ひごろ意根いこんをさし狭はさまむ扱あり森口もりぐち、源太左衛門げんたざゑもんじや、扱あこそな、鎌倉かまくら武將ぶじやうへのは目見めみへ彼かれ是こゝ邪魔じやまな其方そのかた故門こもん弟共にいともも云いひ付けて家來けらいを拂はらへばそち一人ひとりもはや遁のがれぬ覺かく悟ごして尋常じんじやうも夫おつとへ直ただれ、人ひと非人ひびとのそちが乃金のぶかね、此源八このげんぱちが身みよの立たぬ志こころざしがまほらしい、其方そのかたから覺悟かくごして、支度しだく能たば夫おつとへ出いよさ、こゑやくな

一言夫を口の利納めと觀念してきりく直れく互い目配心の
刃どぎ立く、傍又寄り源八心せく事のないぞよ、斯並んだら互の眞劍
音又聞へし森口が手並の程の眞かうとひらりと抜て切付る、かいく
つて抜き合せ火花をちらして「いとみしが、何とか仕けん源八が躓石の
運のつき、得たり森口拜み打はかなかりける最期あり、何と思ひ知おつ
たか、儕足輕のいよしゑ、まかも此馬場先で馬の稽古よ誤つて、蹄よかけ
て、辨當の割子を蹴上げし我鹿相をよふも人面獸心杯と、悪口をひろい
だな、其時討て、捨んどの思ひしが、小身者を不便など、打捨置内俄の立
身、最早助け置れぬ其はう、森口様が手練の程何とひどいもので有ふが
な、相手よあらぬか、エ、刃向ぬか、ハ、ハ、ヤモ口程よもないもろいやつ、ま
かしながら後日の禍ひ、科を讓る、此二腰追放の節取上げし、弟めが拜
領の刀の拵へ、割筭の片し斗り、摸様の水よ、鶯鷲劍よ、かゝるといめの刀

とそふじやくと打黙頭、悪口根強き森口が探り廻つて民谷か鳩尾ぐつとつらぬく割筭折から人音南無三寶見付けられど頼かむり身纏ひする其内又槌谷内記の造營の壽き祝ふ氏神へ參詣なさんと灯笼よ道を照させ來かする向ふ、供先潛つて森口の危き場所を遁れ行、何心なき下部共躓く拍子又見付る死體、ヤアコリヤ是れ人が切れて居ると聞か内記の立寄て見るか恟り、灯笼是へ持て早く、コリヤ是民谷源八が死骸、オイト疵口をとつくと改め適手練の業物落命なしたる不便の有様、扱の意根の扱む欺し討今一足早くバ斯やみくとの討せじ物、我爲めも小舅無念の最期とげけるよな、仕なしたり残念やど拳を握り齒をかみえめ暫し涙よくれけるが、若や敵の手がしりもと明し見付ける割筭抜き取つてのり押し拭ひ、此筭の片しを以て、わざくとやめをさいたるの、合點行ざる敵の證據摸様の水又鴛鴦我と我手よ科をあら

いすめさとい工み、敵といふに十が九つ、吹消す灯燈、お旦那是の、供せいと、屋敷をさして、急ぎ行

○第四 志渡寺の段

戀する海士が家迄も、一目よ近き志渡寺の、志渡の浦浪名よ高き、丸龜殿の、菩提所今日、劍術の大會迎、集る家中若殿原、競ふ蝸牛の争ひも、風雅よ遠く鳴る鐘の早えんえ、やうと聞へける、掃除片手よ伴僧共、一つ所よ寄りこぞり、何と雲竹、毎年此國の殿様が國府八幡よ御參詣の其跡の、此寺でお家中が、ヤットの劍術桑術の取り合、けふの劍術の聞へ有、森口源太左衛門殿と槌谷殿との立合、何と見もので有ふぞや、能い見物ぞや、この見物の次手よ奥庭の園の桃、毎年殿様へ献上する程有て、大きさも常の桃との違ひ、風味合も格別ぞやげな、夫ぞやよ寄て垣結ひ廻し取事ならぬ、殿敷云い付け、彼辨慶が制札の格で一枝を切らぬ一指を切るべし。

掃除するさへひあいな物、又か目玉を賞りぬ内片付け休ふと傳手も箒
水手桶さげて庭へぞ急ぎ行、一藝も秀し心荒鷹の眼尖き森口源太左衛
門、門弟數多引連て方丈近く入來る、何といづれも過じ八幡造營の折か
ら丸龜の館もおいで生駒の方へ東發足の願ひ、源八と立合いの上ゆる
すべきと有し故勅使見送りの歸りを待て民谷めり、民谷めが横死の
上、定めし某へ發足の上意下るべしと思ひの外年月移り早四五年、手を
ひなしく事を窺ふ其内、鎌倉の武將を武術の達人下せよと此頃度、
のほ催促、夫も付源八が縁者たる、樵谷内記と今日の立合ひ、則殿への仰
せ渡され、又もや工夫を廻らして内記めも不覺を取らす兼との云い合
せ、十藏數馬の内記が門人、某が流義をしたひ弟子も致くれよと官藏を
以ての頼み、彌相違ござらぬかと、尋ねも數馬進出、内記を破門し森口殿
を師匠と仰ぐ我々が潔白内記を則ち臆病者も仕立てる仕様のくぞか

の妙薬酒めうやくしゆを浸ひたして與あたふる工夫くふうと聞いて官藏くわんざう小聲こせいとなり、其酒内しゆない記しめよ吞のまず術てだてがござるか、夫れよこそ究竟くつぎやうは例年れいねんの格式かくしき摩利支天まりしてんへ備そへ有神酒みきしゆへ調合てうごう只一口吞のめば忽たちまちニリヤ聲こゑが高たかかい、其妙薬めうやくの則是すなはちよと懐中くわいちゆうを、出して見せたる一包、森口もりぐちのゑつぼよ入いり、出來きた、身みが頂戴てうたいの毒どく跡あとで見咎とがめられぬ様合さまあ點てんか、委細いさい承知じやうち仕しる、何角なにかくの奥おくで森口もりぐち殿どの、いづれも來きやれと先まよ立強たつちやう惡あく不敵ふてきの森口もりぐちよ、隨まふ牛連うしづれまだら武士ぶし、打連うちづてこそ入りよける花はなの三芳野さんほうの殘のこる名なを借かり、武士ぶしの本意ほんいぞと忠義ちゆうぎを胸むねよ槌谷つちや内記ないき、まづくと打通たうつうれば夫おとこと案内あんないよ出向いふ方丈ほうぢやう互あひよ禮義れいぎ事終ことおわりり先ま以もて今日けふの天氣てんき快晴くわいせい殿どのも益ますますに機嫌きげん能よく國府くにふ八幡やっぺんへ參詣さんぎに歸城きじやうを見送みおくり奉まもり漸やうぜん只今いま例年れいねんの義ぎどのやながら、お心遣こころづひ察さつしやす、是こゝに、扨あい、森口もりぐち殿どのも只今いまは入來いりき先達さきだちてより、内室ないしつ何角なにかくお手傳てづえ預あり圍かこも奇麗きれいよ致いたしてござれば、後程あとほど成なと鹿茶しかぢや一ひとぶく夫れこれの格別かくべつ殿どのの意いどのや

ながら今日の立合は苦勞も存ると撥揆有ればされべく、今四國も誰有て並ぶ方なき森口殿中、某が及ぶ所、是も付けても惜むべきの民谷源八、方丈の推擧もて足輕奉公、殿の意も叶ひ俄の立身、悦ぶ間もなふ不慮の最期一人の悴迄は退放も預る中思がけなき啞の業病、盤屋村も居る乳母お辻艱難辛苦を思いやれば、不便な事も存ると、うむ目の内泣よりの眞實見ゆれば、方丈も持ちたる珠數を手よく上げ、蠢々含靈有情といへる、いづれ恩愛の道をしらざらんや、人情最期の無念、心残り、坊太郎、子も引かざる、親心噓かして存ずれば、噂も連れて思ひぬ、落涙大切、な今日の大會古例も任せ、摩利支天の神酒頂戴が肝要と、紛らす詞の奥よりも、内記が妻の菅の谷の襦姿まどやか、神酒の三方うやく、敷夫の前も直し置き、森口様も神前も、おいて神酒頂戴、お濟む上、あなたへ持參致せよとのお差圖、お戴き遊ばしませ、成程例年

の式禮、頂戴致さんと、塵手水手又取り上る土器へ何心なく女房が瓶子の口もつぎかくる酒又秘薬の有ぞどの神ならぬ身は白紙の障子一重又窺ふ森口々つとほしたる槌谷が顔色常又替つて五體のふるひ、仕濟したりと立て切る音驚女房ふしんの方丈、内記殿いかゞ召された、何となされた、コレヤ、は持病でもおこりしかと、尋る内又心をまづめ、心得ぬ、今呑たる瓶子の酒の、んどを通れば五體又まみ、心苦敷此有様若や毒酒、何と、ヤ、定めて毒虫でも入りつらん服薬の奥の間、成程大會も程もなし、客殿へ同道致さんいざこなたへと立ち上る、衣の袖や、上下の折目正しき襦も、さバけぬ心取と又客殿さして入り又ける、時又ふしぎや晴とたる空も俄又かきくもり梢をならず風の音、物騒敷折から又墓所の方、同宿共坊主天窓又鉢巻しめ傳手より棒引提く、息もかよひき賤の女のゑり髪纏んで引きすり出、爰な狼籍者ひさいきたかゝい形

をじて見れば珠數と櫛しきみを持墓所はかばかへをきよろ付き歩くうさんくさい
女に殊ことよけふの國主くにぬしかお歴れきくのか入りよ付つき清きよめよ清きよめた靈場れいぢやうをけがし
たせうこは今の大風おほいぜうこいつは何ぞ、まじくさはりの女に又また違ちがひの有あるま
い、ま、そう玄げんやく、卯塔場うみだうばから起つた風故かぜゆゑ、いて見た所みたまゝが怪あやしい女に靈れいけ
んわらたな觀世音くわんぜんわれらが罪つみの構かまひね共ともどふやらおいらが腥なまさ物を
かくし喰くひする様ようよお師匠しじやう様よう又また思おもはれては坊主ぼうしゆの行ぎやうが濟すぬ故ゆゑ、引ひすつ
ていて云譯いんぎけする、くうせいと引立ひきたる、まじくくお待ちなされて下くださり
ませ姿すがたの賤いやしい者ものなれ共とも、全く左様さやうな穢けがれ不淨よじやうの身みでもあし又またお歴れきく
標ひらのか入りどの夢ゆめよも存ぞんませず、志こころの日ひ又また當あたれば、墓はか參まりは致いたしたれ共とも、
此姿こゝろで方丈ぼうぢやう様ようよお目めよかゝるもおもてふせお聞き分けなされて、此場こゝの
ゆふどお歸かへしなされて下くださりませ、お頼たの申まをす上うへますと云いふ尻しつ聲こゑも力ちからなく
弱よわり果はたる息いきづかひ、様子ようす知らね、同宿どうしゆく共とも、おかしといわい、佛ほとけの爲ためと

ぬかすが、おらが寺よは我が様ぢ、乞食の旦那方はないぞよ、偽りかたる盗
人女、かまひずと引つ立いと、情け用捨もあらく、敷手取り足取り立騒
ぐ、かくと見るも坊太郎走り寄つて同宿を、つき退く、お辻をかこひ、涙
ながらよ手を合せ拜み廻るを見て取る雲竹、念西見たか、坊太郎がま
せるく、人を助けるの出家の役と、聞きはつして拜むの、其女を助け
てくれといふ事か、そふかくと、問ばうなづきいたひけぢ、小指出した
り我乳をおしへる仕方、早呑み込みの同宿共、よめたく、我等が仕方
の今はやる歌の事か、歌の事といそりやとよして、何よ付けても
小指が邪魔よ、小指殺しの醫者はしやと、いふ事で有ふ、何をばかな
早く方丈へ、合點と遠慮なく、引つ立られてかよひきお辻うんと汗り
よ倒れ伏、是はと驚同宿より坊太郎のうろく、と抱起しても正体の涙
片手よ水鉢より流るゝ冷水手よ救ひ、口よ合ませ抱きかへ様よとい

たれど、其かひ更も有ざれば、立たり居たり、同宿の袖褌引いても見向
きもせず、詮方つきて子心も思ひ付いたる、一思案有り合ふもやう鉢兩
手も持ち、伏したるお辻が耳のはたくりんと鳴せば、胸りし、飛び退く同
宿氣の付く乳母、和子、お前もお怪我なかつたか、嬉しや〜〜と
引き寄せて、云ふ事さへもむねせまり、泣より外の事ぞなき、よい〜
氣が付いたらば引ずつて行、くうせいと立寄うしろへ菅の谷が、
先暫く、其女こそ夫なる坊太郎が乳母なれば、方丈様のお傍へ連行、
云い譯さすも及べぬ事、お前方の部屋へいて、休足なされど和らかよ
丸い捌きも同宿共、ぶつくさつぶやき連れ立ち行、傍見廻し菅の谷、お
辻が傍へ歩み寄、別れて程へし乳母お辻、此子の事が苦も成つたか、昔の
姿いつしかよ、流涙の身どの云いながら、母も増る養育の、此子のお寺
そなたの又塩屋村の詫住居も衰へはてし顔の瘦、ちつと心も張り持つ

て此坊太郎を成人させ、父の敵を討たせよと思ふ心のあいかいのふ日
頃、似合ぬふがいなさど異見半分罷畧なき、實氣を聞て手を合せ有難
い今のお詞、敵の誰と知ね共、お主も聞ゆる民谷の何某相手も仕留すや
みくくと、は最期有しは是正よだまし討つ極りしど、思へば無念さ口惜
さ、何卒修羅の妄執を晴さん物と思へ共、和子様の病、弓矢神よも佛神
よも見放されたる物なるかど、かなしさ餘つて病となり、此程の食事も
たへ、米一粒粟一粒咽を通さぬ力あさ、湯水の通り斗よて漸とくだ物よ
命を繋ぎ惜からぬ月日を送るも太切な和子の病が直したさ、則ちけふ
は主人の命日、心斗りの墓参り手向けの水も涙よて過越方のうき
思ひ、お主の非業の刃よかくり、たつた一人の思ひ子に生れも付ぬおし
ころの病よ沈此乳母が悲しさいいか斗り、思い廻りせば廻す程世界の
因果が身一つよ、報ふてきたか淺ましやと、人目も耻ぬないまやくり、管

の谷もうき涙物得云ねど坊太郎足摺^{あしずり}きたるいちらえさ三人顔を見合
せて一度又わつと泣く涙名又おふ志渡^{しほ}の浦風又磯浪^{いそなみ}寄る如く也菅の
谷漸泣く目を拂い悔んでかへらぬ世の盛衰^{せいすい}方丈様もお目見への上
そなたの病氣養生は内記殿も相談せん併し退付^{けんじゆう}劍術の大會おれば
暫く休んで心をまづみや坊太郎そなたの部屋へ合點か早ふくくく
打點頭^{うちていとう}手を取り稚子嬉しげ又養い^{やしち}和子を杖柱^{つえはしら}立上れ共よろくく
と風ももまるくくがよの弱るお辻を抱拘^{だまかへ}ちから泣く立て行く跡見
送つて菅の谷いえはししはれて居たりしが身腹^{みはら}分けねど育つれば夫
程又迄可愛い物かそなたの其深切^{しんせつ}が届かいで何とせふ長者^{ちやうじや}の捧し五
燈^{ごとう}も僅貧^{わづかひんちやう}女の一燈が百倍増たる未來の手向^{みらいのなむけ}草葉の蔭^{かげ}の兄様が嘸^{まご}悦ん
でござんせう嬉しうござる忝い爰からおがんで居るぞやと伏し拜手^{うしがむ}
も露涙かゝる所へ奥庭^{おくにわ}も息もすなくくぬしのぶは注進^{ちゆうしん}と手を突^つけば

あいたゞしき注進どの森口殿との立會、夫の勝を知らせの爲か、奥襟の仰の通り、意地悪の森口殿定めてまけと思ひの外、且だんち那樣俄にわかまがたく、震ふるひが來て、まなへ持つ手も定まらず、二打三打其跡あとの、まどろよ成て森口殿、勝かち又極たぎり鼻高はなく、ほんよ悔くやえう存ぞんじますすと聞くより、菅の谷口惜涙しみ、物をもいはず一間の内、欠込かけこ向ふへ源太左衛門、はつとたゆらふ其内うち又續つづいて内記弟子方丈各座席定さだまれば團左衛門進出すす扱あと先生きつひに手際てぎ音ね又聞へし内記殿、定めし手強立會てつと思ひの外、猫ねこに追おれた鼠ねずみ同前どうぜん、ヤヤ驚おどき入いりましてござる、ままく夫おとこいどふしたに扱あ扱あ、尤も殿へは師範しはんやす身共みどもあられ共、内記殿も聞ゆる達人たつじん畢竟つひつ時の張合はりあとす物すりや何内記殿、互あひの勝負せうぶは時の運うん、團左衛門殿の只今の龜かめ忽と眞平まへに免下めんげされて、必共かならずよ心こころよさへられなど、面おもて又飾かざる仁義じんぎの詞針ことばを合あし内心うちこころと察さつしながらも慇懃いんぎんよ是こゝに痛いた入いたるに扱あ扱あ、武藝ぶげい未熟みじくの此内記、中な

貴殿の相手どの存じも寄らぬ事ながら、主命是非なく今日の仕合せ、面目次第もござりませぬと、互又卑下は有りながら、善と悪とは見て取る方丈、勝も負るも時の運、さし出がましき事ながら、只今迄の如く水魚の因、それが則ち殿への忠義、意恨残らぬ印の盃、何坊太郎、付たる銚子盃、急いで是への聲の下、兼て用意の三方長柄、持て出たる小坊主の、おとなしやか又扣ゆれば、源太左衛門じろりと見て、此小兒こそ噂又聞、民谷源八が悴と見ゆる幸の酌人、小僧よ、是へ參つて酌致せ、内記殿お始めなされ、先と其元より、ハテサヤさバ古參の其元、ひら又先の貴殿方、左様ござらバ押ても返つて無禮、いづれも免下されいと、取上る盃へ酌する行儀しとやか又、又押下つて畏る、内記の盃改て、しからバ何森口殿、慮外すと互の禮義、盃取て森口が差出せ共、さよろしくん、つがぬか酌せぬかと、いへ共啞の返答あく、虫が知らすか子心よ、い

やどかぶりをもふる斗り源太左衛門目よ角立ツノよつくひ小倅せがれ内記殿へ
の酌仕ながら我等も耻辱ちぢよくを興おたふる不届なつ、是へうせうと立ちかゝる
方丈しほ暫しばと押留おしどめめ立腹りつぷく去事ながら辨わかへなき小兒せうての不作法ぶさほう夫とすず
も貴殿の威勢いせいは畏恐おそ子心こころもこはいと見へますお酌しやくの餘人あまはす付る
でござりませふ、アイヤ、方丈しほそふでござらぬ、三つ子の魂たましひ百迄ひゃくと、只今ただいま折檻せつかん
加くへねば又重かさねてかゝる無禮むれい以後の見せしめ覺おぼへよと首筋くびすぢ取とり引居ひきゐる
坊太郎ぼくたろうが袂たもとより桃ももの光り身みはがたゞ、臆病おそ風かぜは顔かほの色いろ、樋谷ひがやが妻つまの口
りど抜ぬて差付さる刃やいばの光り身みはがたゞ、臆病おそ風かぜは顔かほの色いろ、樋谷ひがやが妻つまの口
惜涙おしなみだ方丈しほ始め門弟かども興おたの覺おぼたる風情ふうじやうなり、森口もりぐちの思おもふつぼ、おんけふの
立會たてあひ合點あつてん行ゆかずと思おもひしが、内記殿の臆病おそ未練みれんかてし加くへて此小倅せがれ今
袂たもとを落おせしむ、當寺たうじは名高なき園そのの桃もも殿とのへ獻けん上じやう濟すまざる内うち盜ぬす喰くふ、おち横道ちやうだう者もの
其その筈はずでも有あふかい、元もとが足輕あしがら成なりり上ありの民谷たみやが倅せがれ盜ぬす人ひと根性こんじやうが有ある故

よ、罪が當つて啞と成つたる業さらし、献上の才譚此儘よの濟ますまい
と、底よ意地持つ詞の端管の谷たまらず、ずつと出、森口様、いつよない
夫の有様、病のわざか障化かと、案じ重さなる坊太郎が、折り悪ふ取落せ
し、桃は、盗んだのではござりませまい、枝が折て二つ三つ、落たを拾ふ
た物で有ふのふそうか、く、黙頭ておりますれば、もふ了簡してお
やりなされたが、よからふ様よ、存玄ますると菅の谷が甥の難義を言ひ
抜ける、成りませぬ常の桃とい違ひ西王母が譬よ引き、殿へ献上の
桃を盗む大罪人、折檻は身共が脚と、坊太郎を椽々下へとうと蹴落す傍
若無人驚く方丈菅の谷が、あやと見る内廣庭々、こけつ、轉びつ乳母お
つち、走り寄つて坊太郎を抱拘たる涙聲、和子、大事ない、乳母の辻
が來た程よ、心を慥よ持て下され、いかよ誤り有れば迎、かよ、い此子
をめつそふあ、其、高い所から蹴落すと云ふ様な意地の悪ひ、悪い

悪い、此子が悪ふござりまする、鷹一本でも人様の物、盗と云様な事が有物でござりまするか、是斗りの子供迄や迎、天道様が赦しなされぬ、森口様へ申上ます、私に辻と申て此子の乳母でござりまする、方丈様への申譯け、急度折檻致し様もござりまする、幾重も了簡、一重も願ひ上げますと、額を土に墮落、ス、其方の此小悴が乳母か、よく乳母でござりまする、むさくろしい形を、あがつてうそきたない、方丈への云い譯斗りで、殿へ献上の申譯け、何とせふと思ふておるぞ、其義の辨へ知らぬめろりの猿智恵、すつこんでけつからう、此前への申譯、今森口が眞二つふち放すと、持つたる刀振り上れば、方丈其手をしつかど留め、お手討ちは成りますまい、又なせな、さればでござる、坊太郎又誤りが有、誠むるの愚僧が了簡献上の桃、あれ共、菓よ人の命よもや取らふと御意も有まじ、よし又左様の義も有らば、人を助ける

の出家の役、どこ迄も坊太郎が命乞を仕る、うまて又献上の御譯けり、お聞入れなき時は是非及ばぬ傘一本、餘人にお世話の頼みゆさぬ貴殿も刀を納めば歸宅有ては休足、しかるべう存ると、出家堅氣又云まくられ、追の森口あんどりと刀を鞘又納めた顔、命冥加な仕合せ者、方丈の詞又随ひ犀敷へ歸り休足致さん、方丈今日いかひは雜作、何内記殿、お先へ參る是のえたりまだ震ふてござるか、内證の薬でも進せられい、片腕共思ふ内記殿の臆病、最早武藝一通り又いはは凡日本立つく者なき源太左衛門、武士たる者のあやかる様随分と機嫌を取り、稽古又出精召されたがよふとござる、ひよつときげんの取りよふが愚ひと、殿で有ふが又どなたで有ふが、ぶち殺して他國致す、さすれば天照太神が天の岩戸へ籠つた様な物で、讃岐一國の常闇と成り申す程又、氣を付けて勤めさつとやれ、委細承知致してござる、此數馬十藏も

臆病師匠を破門致して其元と師弟の契約直く又壁の盃へ、お屋敷まで仕らんまからば一所よ、お暇すそうかど、あく迄高ぶる高慢我慢門弟引連れ森口の悪口たらと立ち歸る、無念と思へど詮方も、内記が傍ま差寄て、今、今の悪口聞かまやんしたか、お前の悔しうあいかひなど、押し動かせど正体も、詞なければ方丈制して、奥方、内記殿をば客殿へ、同道有て介抱坊太郎の乳母お辻、能もど斗り跡云ず、内記が心計兼いたはる菅の谷方丈も打連てこそ入相も、花は昔と散失て、今は老木の乳母お辻、思へば思ひ廻す程、醜しや稚氣も、盗心の付いたるいか成天魔の見入ぞと、顔打ち守りく、暫し、涙よくれけるが、和子、こなたのふ、此乳母の教へんせぬよ、いつの間も其様な、さもしひ氣よならしやつた、桃は此寺の名物殿様へ、献上の濟まぬ内の方丈様の愚な事、お音様へも上げぬげないかよぐんせがない迎も、こなたの今年でも

ふ七つ醜みにくじいと云ふ事のちつとどりわかちりないかひなふ方丈ほうじやう様の手
前内記様ごふは夫婦の思おもひく、ふりや恥はづかしうて、く、顔かほさへもよふ上な
だいの、其その邪よこしまな心から爺ぢやう様の非業ひごうの最期さいご、こなたは無念共思ともひしや
るまい、不孝ぶこうの罪つみが身み又報むくひ、生うまれも付かぬかたの者もの啞おしと成た又氣が付か
ぬか、母様ははさまの賤ひんしい傾城けいせいと、素情すじやう顯あらす今日けふの時宜しぎ、コレ人間と生れたの只
一心の置き所いどころ賤ひんまうても、きたのふても腹はらの借物かりもの、こなたの爺ぢやうの誰有
ふ、民谷源八様といふ侍の子のする所作しよさか、そふ云ふこなたの心と知ら
ず、此乳母このちちの明け暮たんちふ、旦那様の無念むねんの最期さいご、儕敵せいてきを詮議せんぎして、討たさん
物と思ふ肉、啞おしと成つたるこなたの業病ごうびやう、藥祈いぐさ禱とうも聞かばこそ、詮方せんかた盡つぎて
當國とうこくの金毘羅様へ立願りうぐわんかけ、病氣びやうきと云ふたの偽いつわり、誠まことの金毘羅様へ火の
物もの断たち食事しよくじをたち、くだ物又命いのちを繫つちぐ此乳母このちちが、清からき體からだを穢けがれ、其病びやうひを
直して給たまはれと、祈いのるお辻つじが誠まことの心こころ、稚心ちしん又分わかるなら、どふぞ心をため直

し、紙一枚塵一本、人様の物盗む様なさもしひ心やめて下され、見やしやれこなた故、此乳母が元の姿はどこへやら譬つゝれいまどふても、心を錦にしきななぜ持て、爺ぢやうの敵を討ち負せ、名を上ふどの思はずかど、恨つ泣つ、さまざま五臓ごぞうを絞しぼる血の涙息も、絶たゞ絶せつ食しょくよ、心苦くるしき其風情目も當てられず、いぢらし、何思ひけん坊太郎、白砂しらすなをかきあらし、斯と仕形しかたに乳母お辻涙拂ふてつく、詠ちやうめ、何なんじや、と、様が死まやつたを忘わすれいせぬ口惜がしい、又桃ももを盗んだい、さつきよ伯母おば様へ乳母が咄はなしよ、おれが病氣が苦くるみ成て、米も粟あわも喰たべれず、菓くだものも命いのちを繋つなぐといふた故、ひよつどわれが死ふかど、夫が悲かなしい故、つい桃を取つたのもわれ遣やふと思ふた故、もふ是からあんな事いせまい程、堪忍かんじんえてくれい、そんなら桃ももを盗ぬすましやつた、此乳母このちちもくれふと思ふてか、此乳母このちちよ、よふ盗ぬすんで下ださつたのふ、可愛かわいの子やと引き寄

て抱しめく、くこらへて下され赦して下され、そふどの知らず色よ
も、耻しめたの何事ぞ元をいへば盗人の、悪智恵付けたもやつぱり此乳
母思へば、是程の賢い智恵を持ちながら、何故果報拙ないぞ、爺はが
此世よござるなら、馬の稽古よ學文よと、座敷の内もお手車乳母も衣裝
を着飾つて、ちよつと出るも、徒士若黨美く敷い行列有るべきよ、小僧
小僧と口きたなふ、森口づれが足も迄、かゝる憂目は何事ぞ、現在母は
有ながら、三つの年々生き別れ又爺はも死別れ、能く親は縁薄き、
こきたがいとしうござるのと、くとき立く、わつと斗り、歎きしが、は
つと心を取り直し、夫れよよしない歎又時移、乳母が命の權現へ捧し
儀此和子が、業病一度本服あさめて本望遂させたび給へ南無象頭山、
金毘羅大權現、一念凝ての髪逆立、眼血走る有様、坊太郎の只うろ
うろと脊撫さするを見向きもせず兼て嗜む守り刀、拔は稻妻逆手も取

り、ぐつと突き立引き廻せば、驚き絶る坊太郎が顔打守り、打詠め、物を云しやれぬか、南無金毘羅大権現、物をいわつしやれぬか、南無金毘羅大権現、是程迄は祈誓をかけ、命を断て願ふても、やつぱり物がいわれぬか、扱ひ金毘羅権現も見放し給ふか、はつと力もお乳の人鞠れて詞、なかりけり、お辻、誠心相届き、権現納受有つたるぞと、一間を出る樋谷内記管の谷諸共欠出て、お辻そなたの誠の届ひたぞや、是氣を慥に持やいのだ、拘へを直し腹帯と、心を添る介抱し、愚の内記の聲はげまし、坊太郎今こそ赦す暇乞乳母が冥途の餞別し引導せよと、樋谷が詞、聞か坊太郎合掌し、迷故三界城悟故十方空、南無阿彌陀佛、く、く、く、そんなら物が云れるか、乳母よ、堪忍えてくれと、わつと斗り、泣き出す、よふ云ふて下さつたのふ、く、く、く、愧びの尤も、坊太郎も口留めあし置く子細といふ、五ヶ年以前三月十八日、國府八幡造營の節、我も

社參と馬場先を通りかゝり玄鳥居先、血も染死骸心得すと、改見れば民
谷源八、南無三寶との思へ共ばや敵の逃失たれば是非もあく、若や手が
かりも有んかど、灯燈の明りもすかえ、能く見れば斧よてといめを遠敵
の抜目、又坊太郎斯て有あらば、根を斷て葉を枯さんと窺ふ者も有んか
ど、此寺へ預け出家となし、詞を留め啞となし、縦いか成る事有り共、此内
記が赦す迄、必物を云ふまじと教し、詞守り詰め、そちが最期の今迄も、掇
こそ啞と成たるぞと、始めて明かす槌谷が本心、適成りける武士なり、
是迄此和子が啞と見せし、拵へ事かそうどの知らず一心も、金毘羅様
へ祈誓をかけ、三七日の斷食、艱難えんくも水の泡、いやくそなたの誠心正
しく、金毘羅權現納受あつたる印、其譯知りし、我々夫婦、坊太郎も敵を
討たせんと、密に屋敷へ招き寄せ、教ゆる、武術も道の子ども忘るゝ事の
多かりえ、心得ぬ、此頃、武術の覺へ、智慧才覺おどなも及ばぬ、發明

さ、不思議く〜と云いくらす、日數も丁と三七日、そんなら私がこの命、捨
たも功も立ちましたか、ま、立たども〜、疑ひもなき證據の、まざ〜蒙
る夫の靈夢、軍術の聞へ有る東國の青柳家へ坊太郎を送れよと見し正
夢を幸ひよ、東の母も廻り合、コレ此筭の片しを以て、首尾能敵を討た跡、
必出家得道して、乳母が亡跡亡父の、菩提をとどへとくれ〜も、伯母が詞
を守つたる、此稚子の敵討首尾能く仇を討し後、其名の空仁大徳と、道徳
末世又咲き匂ふ、花の上野の片邊り、古跡を残す石碑の、譽の今又著明か
迂の苦痛も打ち忘れ、有難や忝あや、念願届きし此世の本望、只不審な
い内記様、日頃又似合ぬ今日の立會、夫こそ森口が日頃の行跡、源八
を討たる者、正しく渠と我黒星態と勝ちを譲りしに死たる民谷へ寸志
の情け、靈夢よ任せ青柳家の奥義を傳ふ夫迄の、足を留めたる我計らひ、
赤練と見せしも捨へ事、我腹心の門弟たる、數馬十藏、急いで是へ、はつと

答へて庭の面木陰を出る二人の弟子、内記が前より頭を下げ仰ぎ、隨ひ森
口が弟子と成て胸中を探りくじかの妙薬の壽命を延る薬共、心の付か
ぬ源太左衛門先生を忌嫌ふ底意の慥は源八殿を討たる實否を糺すの
我より必氣遣ひあられかと語るこなたへ方丈立出委細の様子にわれも
て聞、不便なるの乳母お辻、命を捨し心願の空しからざる其證據に、内記
殿の正夢より割符を合す愚僧が夢より貴僧も其元も、是の不思議と人
人も、あらた成ける權現の奇瑞を感じる斗りなり、重くの靈夢の告、念
願叶ひし此世の思ひ出、心がしりも晴行く月西方淨土へ赴いて、旦那も
申し上るのが、此乳母が冥途の土産、早お暇と腹帯を解んとする、待て
暫しと押し留め、汝が誠届たる坊太郎が武術の上達、草葉の蔭の源八も、
未來の土産、餞別せん、夫より用意と内記が下知、菅の谷心得坊太郎用意の
袴りししくも小太刀かまへて、待かけたり、十藏數馬の左右より別れ、かた

づを呑だる時しも有れ、さつと吹き來る風も連れ、杉の梢もありくくと
顯り給ふは姿の、正しく金毘羅大權現と、神ならぬ身の白洲より、白眼
合ふたる曠勝負、やうと打ち合早業早足、上をつかふ神力の風も、隨
ふ小腕の働き一服、二早足、上段下段、いらつて打込む兩人がまなへを丁
と坊太郎稀代の手練見る嬉しさ、顔に笑へど胸の内、早せぐりくるだん
まつま、物云いたげも延上る、手負の目よりまざくと、拜れ給ふ梢のか
た、金毘羅大權現、有難いと伏拜む、心ゆるめすがつくりと、嵐も誘ふ
乳母櫻はかな、かりける

○第五 碑文谷の段

南無妙法蓮華經、くくくく、流行物かや時よまきのふの新田碑文
谷と、うつればかゝる仁王尊此頃靈驗著く、聞傳へたる參詣の浮氣信心
さい交、繕のお百度立願を、懸奉る大わらぢ、幟灯燈數知す、處挾しと賑

いへり、百度参りの籠人が數も滿れば寄り集り、何と皆の衆有難い事ではないか、わしの一體昇性と云ふ事か去年から目がかすむ耳の聞へず色と療治して見たれど靈程も利ませぬ故、藥を止て七日の斷食、此仁王様へ願込えて毎日のお百度、信心のお影で目の霞もとれ耳もだんだん聞へてくるど、何と靈驗あらたな事でないかいの、さればこの此頃も何所の人か知らぬが、斷食の終る日、何やら菓子を喰ふたげなぞふする、忽亂心と成つた故、お詫言て又七日の斷食したとの事、利めが有れば罪もひとひ、随分と氣を付ふぞや、一休とんだら又お百度、ござれと打連て籠堂へと歩み行、又も一群端手かざる駕籠もひらつく緋縮緬遣手禿も一やう、跡から付て大盡頭、岩本ならぬ岩代が戀も心もつかれ足牽頭がはやす口車も、積れぬ藁の大わらじ、かつぐ男も指荷ひ汗もたら〜

エイサツサ
エイサア
エイサツサ
サア

かけ扱あつかも皆も太義たぎで有たちつと爰あで休めく、いやくいやくもふ餘り大き
き草鞋わらぢでひつたり汗あせも成りました、チ、そふ有ふく、いや又此わらぢよ
り、松坂屋まつざかやの左達さだちが聲こゑの何と大きな聲こゑでないか、チ、お松、ハ、左様さやまでござ
ります、こちらの旦那様だんなさまの聲程こゑほど高い聲こゑのござりません、見せで咄はなしてござ
つても、見通みとおしの座敷ざしきへ筒拔つくだでござります、いな、イヤ、筒拔つくだの次手つぎて此仁王このにぎはら
門かどを抜けて、一時も早ふ其わらぢ納なてくれい、いやく、いやく、畏かしこまりました、チ、早く早ふ
よ男共おとこども荷にふてこそ、行過ゆる、跡見送あとみどつて岩代傳内いわしろでんない、今流行碑文谷いまはやるひもんやの仁王このにぎはら
とい爰あの事こと、品川しんがわからも餘程あまの道みち、駕籠斗かごたりで、嘸氣さそ語ごり、野風のりかぜを爰あへ早
ふく、と猫撫ねこな聲こゑも立ち寄や、かぶる垂たを上げ、立出たる、駕籠かごの取りなりし
やんと、え、て一二争あふ松坂屋まつざかやが抱かかへと見へて可愛かわゆるさ、見るか猶なほも有
頂天てんてん、く野風のりかぜ爰あへおぢやく、何と又内うちと違ちがふてかふ出でかけた所ところの氣
が晴はてよかるがな、今日連立けふつらて爰あへ來きたも今流行出いまはやるでの仁王このにぎはら尊奉納そんほうのうの、

草鞋氣をはつたのも有様の吾儕もなびいて貰ひたさ、戀の願ひの願も
ふで、何と憎ふの有まいがとまなだれかゝる、盪の目細目可愛男のよら
むふ、まだ上越て憎らしく思へど態と和らかゝ賤い此身を夫程迄も、思
ふておくれるお前の心嬉しい故もけふ爰へ連立つて來た此野風心も
深い願ひ事仁王様を頼ん爲よふ連て來て下さんしたと、口より云へど
心又はせかれし人の身の上を案事詫たる門違ひ、夫と牽頭がそゝり歌、
よいかくど上から問べよいか夜中かわえや夢現鐘つき坊様も問え
やんせよいやな、くや旦那様どふやら味あせりふ付てつきり是は仁
王様おかげが見へて有難い、よいやな、何と争ひれね物ぞやとざりませ
ぬか、宗助そふでないわい、野風がおれへいつもない今の様なやさ
しい詞の碑文谷の次手も目黒の不動へ參る様で、どふやら心がすめや
らぬと、いへばお松が引取つて、傳様の疑ひ、深い今の様もおつじや

ると野風様よどふやら間夫でも有る様な口ぶり、そこを糺すが遣手の役本よりの毛で突た程も其様な事はない、此松が證人でござります、でも今迄おれよなびかぬ野風、そこが諸譯手管の所、取分け江戸の女郎様方の張の強いがお定り、木おりよならぬが戀の道、兎角辛抱が大事でござります、いいな、いわけがそふ云ふても辛抱も程が有るいい、これ迄一所よねた事の有れど終り門口へ手もやらさず、おれの辛抱する氣でも、獨の悴めが涙を流して頼むはいや、詮方つきて身請けの相談、三百兩で手を打て此頃渡した五十兩の手付證文持ておれば、跡金の出来次第身が屋敷へ引取て、日頃の思ひ悴が溜り一時よはらす合點、そふ成たら二人連れ花見遊山の心の儘、面白い事で有ふぞやと背打擲けば身にしみて、心よかゝる身請の沙汰聞程傍り居る事もいやと云れぬ勤のならい笑顔作つて、お松殿里の苦げんを遁るゝも神佛のお影なれば、

本尊様へお禮参り其跡に仁王様へお百度、ちよつと参つて來る程又傳
様の此信樂、ツア、く早ふと目で知らせれば本又夫、私も一所又参りませふ
小蝶もおぢやと立上る、そんならおれも一所よと、云を野風が振切て、お
松小蝶も跡又付、吉祥院へと急ぎ行、傳内の月夜又釜ぬかつた顔もどん
くさい牽頭の宗助氣轉の手拍子、コレくお銚子持ておぢや、忠介の居やら
ぬか是のどうじやと立騒々茶店の内方下女おふく、銚子盃持ち出て、
是の傳内様宗助様ようお参りなされました、今日の日且那樣も用が有て
江戸の方へ参られまえた、何よもなければ酒一つと、云又傳内打駄頭
酒よからふく、忠介が江戸行の又芝居見物か、おれ程芝居の好きなやつ
はない、コレお福我も久しう見ぬ内よ、仁王へ願でもかけたかして、色も白
ふ鼻も大分高ふ成た、又傳内様の悪口かいを、私もお前様品川へお
はまりできつう色男よならしやんしたのいな、コレマア聞てくれ、其色男

も野風めも振付られてやくたいこくたい、餘り腹が立た故金でせかせる身請の相談、まだ其上よどの様な石部金吉金兜でもついでする、と手又入れる奇妙な薬を持て居る、夫こそ究竟手短道具ちよつと拜見なるまいかと、色又目のない牽頭宗助同氣求て懐中、紙入を取り出し、此二つの香包の姪亂香悲歎香と名付て毎年石町の長崎屋へ来る阿蘭陀人も乞請けたも、まさかの時の用も立ふ爲姪亂香との惚れ薬悲歎香と名付けし、陽氣も陰氣も轉じかへ、どの様な事でも愁い催す不思議の名香何と能物が手又入ふがや、本も夫の奇妙な薬、悦ぶ事でも泣かすとの何ぼうあらたな仁王様でもはだしで裸で上げさんえよと、云も宗助したり、顔我等の泣事大嫌ひ、泣す事なら好物の姪亂香をどれ拜見と、開ひて見るより一摘、そつと火入へお福が傍能心見と焚かける、香の烟の一筋もお福が鼻へ入るよと見へしが俄も、衣紋かき合せ髪撫て見つ形

振を見合す兩人袖引合、笑ふも知らず、抜き袷あきひこつく鼻はなの低ひけれど
高い頬ほべた、赤あからむ顔かほ耻はづかしそふ、傳内が、手先をじつとしつと傳様でんさま、わたしや
お前まへよ、ア、ナ、いろはよいろは、わたしやお前まへよいろはよ、いろはの手本てほんを
か、す、すかんお前まへも粹すいのやうよもないや、ぼな事こといふて、おや、ほの字じじや
いいな、と、恟びつり傳内宗助でんないそうすけ扱あつかも不思議ふしぎと、鞠まり顔かほお福ふくの猶なほもほれ、と
是迄こゝ堅かたふ持もた身みも俄にわかよ、おまな氣きよ成なて、惚ほたが因果いんぐわ、男おとこ能返よひ事を聞きし
と、びつたり抱だつ、くいやらしさぶんど、薰かほりし、まうきよ、恐れ、物喰ものくの能の
い傳内でんないも、其儘まじ取とて突倒つくだし、寄よるな、寄よりかゝるな、まだも爰せんよ線香せんかう
がたいて有あればこそ、其くさみではたまらぬと、逃にんどするを、引留ひきどめ聞き
へませぬ傳内でんない、夫おとこ覺おぼへてか、去年こぞの春はる、目黒めくろ参まりの土産つちさんじやと下くださんし
た、明あいた口くち、其餅花もちかがゑよしよて、低ひひはな香かのちや、漬つけよ通とふ給仕きやうじ
のはづかし、く隠かくした顔かほの丸盆まるぼんよ、むまい豆まめやと、仇たね口くちも、嬉うれう思しうて居ゐ

る物を、今いやがられ捨られて、此身は何と云がらさの、せんぞ誥りし戀
甲を見かへられたる野風様、いかも私が水茶屋の女じやとても水くさ
い身請けするというらめしい憎い男と恨泣き、いまくししいふんば
りめと、突き飛ばされて詮方もそんなら差誥宗助様、思ひ晴して下さん
せとすがり付けば振り放し、夫はたまらぬと逃出すをそふりなら
ぬと取付くお福、振り切る宗介傳内、紙入大事と懐ぬねじ込押込欠行
をきたなし返せと裾ほらく、鼻を撮んで兩人は逃るをやらせと追ふ
てゆく箱根八里は馬でも越が越さず又越されぬ大井川、竹又雀
は、品能く留る留めて留てとまらぬ色の道、とめて留らぬ色故も、
心亂るゝ龜次郎が刀よかはる竹の鞭野風が知らせ嬉しさの息せき爰
又碑文谷の立木よ馬を繋ぎ留待人遅き摺火打烟草くゆらせ獨言、人
の行衛と水の流定めないと云あがら、森口龜次郎共云れし身が馬士

姿も硯の詮議心を碎く其内も戀は曲もの昨日の知らせけふ傳内と違
立て此寺へ參ると云ふみゝ氣をせきいつきせき來事は來ても此風體
どふえたらよからふと思案も小首片時も忘れぬ念が通てや夫と
野風が龜藏様逢たかつた。くと斗りよて絶り付たる嬉しさの外も
詞はなかりけり突放て尖り聲何ぞや逢たかつた。コヤおかしひわい
其逢たいと云者がおれと火を摺傳内と連立て來て是見よがし碑文谷
參りおいてくれ殊も身請をする筈で最早手附けも濟えなげな賤しい
馬士の身過を嫌い衿も付く儻が心欺されたと思へばけたいが悪ふて
いまくしうて腹が立つわい。コ畜生めどおもひがけなき龜藏が詞も
野風は目もうるみ恨めしそら又男の顔そりや胸欲な龜藏様過ぎし
箱根の別れより筐も残る筈を肌身放さず朝夕も撫つさすりつ逢たさ
の念が届いて今度のお下りお國の首尾のそこねても逢ふ樂えみを力

みて、つらひ勤も身請けの相談いやなきやくめい、儘まなり、好すた男の儘ならぬ、無理な願ひよ、仁王様、願ひよ來たも、知りもせず、捨すけ付くといよふ云れた、何ぼ賤いやしい勤はえても心の涼すずしい野風でござんす、疑うたがなしく、今爰で、お前の手よかけ殺ころしてたべ、わしや死たい口惜おしい餘あんなりむごい心やど、馬士まこよ心中立て通とせかれて後は、いつとても相の土山雨ふると降涙なみだぞ、戀の誠なり、ひよんなせりよを云いかけて、今更何と、野風をよいよをあたの心どい、知らで恨かんだ堪忍かんにんしや、堪忍かんにんしやど脊叩せきたたく、手先の鞭むちよよつこりと、笑ひよ涙失なみだなへり、折ひから走はつて牽頭けんとうの宗助そうすけず、おいらん、さひきよからおまへを尋ねて、來て見たれば龜様と、こんな咄はなしの最中さいちゆう故粹こすいを通して居たれ共、今爰へ傳つ様が、來てならてつきり、又例またの、大疳癪おほかんじやくでたまるまい、早はやふくと云捨て、行を野風が引留ひきど宗助そうすけ様、お前よわえが一生の、お頼たのみが有るわいな、とよぞくと聞ておくれん

か、よふとんず、そんなやぼ玄やないはいな、龜様とお前の中、齒ふしへも出す物か、樂みなふて、勤らぬと、近松が書て置きました、いふもそんな事玄やないのいな、傳内づらめが親方様と相談して、私が身請をするといふて、手附け迄濟だわいな、是非く、行極まれば、わしや龜様と死ぬばならぬ、夫を死でたまる物かいな、よふとんず、香込だ、氣遣せまい、おいらん、大船に乗た様と思ふて居な、さつきもちらりと見て置た、松坂屋の手附の手形あれさへこつちへ引たくれば、跡の氣遣微塵もない、龜様そこらへ隠れて居て、仕上げをば覽と宗助は、元來し道へこなたよ、互又呷き、黙頭合ひ、龜藏をしがらきの、内へ忍ばせ、店又有る、百度参りのさしを取り、心と思ふ願事、押戴きく、信を取つたる其所へ、立出る傳内がそつと野風が後、たまたらぬと抱き付くを漸、ふり放しく、誰じやと思へば傳様かいな、お百度の邪魔なる程、悪事さし

やんすないなアム、ヨイ、そんならおれも吾儕わがみと一所、百度参りを始めう
さしも幸い爰ここ有、お百度を始めふかど、放はなれ共なき野風が傍そばせうと
なしのお百度ひゃくど、南無妙法蓮華經なんぶみょうほうれんげきやう、こいつの中、面白いわい、
迎むかひの事なら手を引き合ふて、仕たい物じやの、いやいな、何じやいな、
ミ、むごいぞよ、其様もむごくまても、吉原での我等われらが活計くわつけい、持もてる所を
見せたいな、第一此傳内様しんせんの身上しんせうがゑいぢや、おらが内うちもいくらも有
る、金のなる木をお目めもかけたいわい、ホ、ホ、二言めり金とど、吉原の女
郎様方ぢやうさまの知らず、金で自由じゆも成様な、野風でござんせぬ、又腹はらを立
る、かいの、コレ、野風坊やふうぼう、今のいおれが出損でそとい、何ぼ身請みじをまたといふても、吾
儕わがみの心が解とねばいつ迄までも石佛いしぼつを拜おがむ、おびき給へ、コレ、風俗ふうぞくな
ら腰こしつきなら、ト、モ、きよといもんぢやな、是こゝにしたり南無妙法蓮華
經なんぶみょうほうれんげきやう、てんごふ斗と、お百度の邪魔じゃまなるいな、南無妙法蓮華經

くく、何じややらとんど氣違の様な、何と云ふ氣違じや、ヨリキとふもたまらぬと、縮投捨て抱付を振はなさんとする所へ、仁王門より牽頭の宗助、お松も俱又走り出、傳様もてますくと、云れて野風がむつと、顔、お前方も、本も、もそつと早ふ来てくれたが能、何じややらあたえつこい、百度参りも亂騒ぎじやわいなア、聞く聞たかお松、本又野風様も餘り氣強い、コレ大事の身請けのお客じやぞへ、何ぼ大事のお客でも、お方よ、身請けえらるゝ事ハ金輪際いやじやわいなア、宗助、いよく今の名香でなければいかぬわい、奇特を見せうと紙入を、こてく搜して、燈亂香、心得宗助持てくる火入の灰をかきあらし、たつぷりくべて野風が傍直して其身も押直り、野風、なんぼ其様又強ふ云ても、退付けわれが方から、ぐよやくくと、段々薫りがしえてきたぞ、皆も見て居い、今んま又野風が亂れの段、さらば見物致そふかど、手盛としらぬ傳内

が落付き自慢じまんの鼻の先皆云合せて一様、あふぐ扇の風、連れ次第次
第、立登のぼる、香の烟けぶりの傳内が、鼻を通してひつこひこ、身よしみ渡ると見
へけるが、時よ不思議しぎや傳内が、さも殊勝しゆせうげな聲音こゑよて、扱あもく、今迄
は、色男いろおとこじやと思ふて居たが、能く思へば無分別むぶんべつ、野風殿やかぜのんく去逆さかは
口説くはなぬぞや、無理瘡むりそう深も云まいと、忽替たちかる顔付かほづかはずりかへて、焚宗助たきむねすけが香
の利目きりめと知れけり、後うしろも伺うかがふ龜藏かめざうが、思ひ付たる駄賃馬だちんば、口綱くちづな取て傳内が、
帯おビよくるよと知らばこそ、野風ののかぜの合點あてん行ね共、若もしやど傍そばへ立寄たて、そふ云
お前まへのお心こころなら、定て私が身請みまがの事ことも、變替へんがの常つねの習なひ、身請みまがせぬ證あかし
據とよ、五十兩ごじゅうりやうの手附てのづかけの證文あかし、そなたよすつぱり今爰いまこゝで、やつて仕廻しまわ
ふが心の潔白けつぱく、今迄いまおかれまいぢられて、嘸なうるさかつたで有ふのふ何事なにごと
も此證文このあかし、是こゝで了簡りやうかんしてたもと、渡せば野風ののかぜの嬉うれしさの、夢かど斗押いた戴たいさ、
有難ありがたい忝かたじけない、忘れの置おかぬと云内うちよ、香かの烟けぶりの跡あともなく次第しだいく、消き

失けり傳内の只忙然と三日醉見る如くよて野風是から直も身共が
屋敷へ連て歸つて奥様なり、女夫の盃した上で、跡金の翌日早と宗助お
松も持せて歸す、行ふと手を取ば、振放して突き飛し、傳内様何事、
たつた今お前の口から、思ひ切る、是で了簡えてくれと、證
文迄くれて置て、今又私を連て行て、女夫の盃する事の、何の角のとお
つしやるは、侍様が睦云ても大事な物でござんすかと、云れて傳内け
げん頭、こな女郎の飛だ事を云、いつおれが思ひ切る、了簡をしてくれの
證文をくれてのど、十方もない事だ、お前話らぬぞへ、いつで
も私は何ぞ云と、野風侍の睦云ぬ睦を云の傾城のならいと常と、
云いなさるじやないかい、な、夫よ、今と成り覺へぬ知らぬとお
つしやるの、お侍の似合せぬと齒も絹着せずやり込むれば、宗助お
かしさ押隠し、傳内様最前からのやうすで、どふでも手附の證文

を、おやりなされたと見へまする、手前迄が何を云ふ、證文の、是もと
懐搜ふんどころさがして胸びつりし、傍あたりきよろ／＼、傍そばも有る、火入をきつと打守り、不審ふしん
しや、最前さいぜん焼やし香かの烟けい我鼻わなも入ると等ひとしく俄にわかも前後いさ辨まへず、現うつの様ようも覺か
しが扱かれ、儕等かが仕業しわざもて、さつきの香かを入れ替かてよふもふぬけよしを
つたな、まだ其上そのうへも證文迄、いかさま懸かけるとい、よつとひやつらと腹付はら
れい、コリヤたまらぬと逃出にげだす、どつこいやらぬと傳内でんないが、さゝゆる跡あとから龜
臈ろうが、首筋くびすぢ擱つかんで突倒つたえ、野風のりかぜを先に宗助むねすけお松まつ、小蝶こてうも連つて逸散いつさんも品川しんがわさ
して急いそぎ行い、こなたの無念むねんと立上たり、逃にれいせじと追おかくる、馬うまのおどろ
き匆はな上のぼる蹄ひづめもかゝる岩代いわしろの、大地おほちへどふと打倒たされ、夢見ゆめみた様ようも思おもひま
が、又起上またおこて行んとす、馬うまの嘶こゑも逸散いつさんも、かけ出せばたち／＼、端綱はなづなも引
れて是非せひなくもお寺てらの方かたへど

○第六 八丁繩手の段

七夕ナツヒ、天の七夕ナツヒおいとまうござる川をへだて、戀をめす、アレンサンシヨ何
とちよん兵衛、今日お通りの大名は、東あづまも名高い青柳左島様と云ふ、劍術
の達人、随分念入まごて掃除さうじせいと庄屋殿からの云い付け、何と大名といふ
者はゑらひ威勢いせいなもんぞやないか、同せ世界せかいも生れても、此百姓といふ
が成る、年が年中あたらふたら、朝の夜から働はたらひて米の飯めしさへよふ喰くぬ、
百姓は人間の粕かすじや、そこでおらが常つねく思ふは、亂世らんせいの時も生れて來た
ら、思はまひ拾ひろい首くびでもして、大名も成てこそそふと思へど、是も塚つかの明
ぬ太平の代、やつぱり親重代の鋤すき鍬くわと、討死せざるまいか、アコゴく五郎
作、冥みや加がもほてた事云やんな、太平くくと太平を不足らしく、太平樂らくを云
やるけれど、コレ今の様な結構けつこうな太平が唐からも有あるかいの、及およびぬ事ことの泥龜ぬいかめ
がお月様を口説やうな物、そんな事を云をより、長生ながいきする分別がましか
い、イイ長生より長ひり此繩手なわて、此長の日ひも朝あから懸かつて、ゑやらうんど漸やく

仕廻ふた、くござれと打連て住家へこそ立歸る程なく來る行列の
武門も名高き青柳殿、振り出す先、徒士若黨、臺笠立傘ぼつ立る跡も隨
ふ山伏のはだへ見へ透破衣、供の下部が口より下がれ、そ、イヤ願ひ
の者でござりまする、イヤ見れば見苦しい山伏、お願ひの慮外、奴此乗物
をどなたぞと思ふ、青柳左島様のお通り、往來さへ差扣ゆるも身の程知
らぬ不敵、奴下がれ、イヤ成程、青柳様どの存じてのお願ひ、面談の上
得と申し上度子、細有是非、お取次頼み存する、こいつは面談とい、法外千
萬、殊も途中の願ひは叶はぬ、ヤそこを幾重も、ヤ詞をかへず、不屈者、レ
いづれも引立て召され、畏つたと、徒士若黨、取たどかするを、右左、もんど
り打せてすつくと立、結ぶ秘文も、たぢく、隨ふ同勢一同、又將、基倒し
も、悶絶せり、乗物さつと青柳左島、凡人ならぬ、今の行跡、そもは身は何人
成るぞ、善哉、左嶋、我こそ、象頭山、金毘羅、大權現の神勅を蒙り、使僧も來

りし相摸坊まみぼうとい知らざるか何金毘羅大權現の使とな、こゝはつと斗り又乗物立出、遙下がつて平伏す、相摸坊凜然りんぜんと此度汝へ神託しんたく有る其子細さいは、いつぞや讃州國府八幡はつぱんをわいてあへさく討たれし民谷源八、其俸たる坊太郎親の敵を討んずと、稚心の孝心かうしんと云い渠を育そだてし乳母お辻命を捨て權現への立願、忠孝せんせう全誠ぜんせいを感じ權現かん其方へお頼みは、武術ぶじゆつ又隠れなき青柳の一流、極め得たる汝なれば、民谷が俸坊太郎へ、奥義おくぎを傳へ後見こうけんして、本望ほんぼう遂とひさせ遣すべし、則すなはち其小兒が誠の母又對面たいめんさせんと、先達さだちて連來り此地このち有れば、品川の宿しゆくまで廻り逢あひ逢あひの間、能あたり計はかり得えさすべまど、權現かんげんよりの託宣たくせんなるぞ、有難ありがたきは使つか未熟みじくの武藝ぶぎ顯あらはれて神託しんたくを蒙ある事、武門ぶもんの譽身うりみの大慶たいけい、何とぞ小兒せうじ又廻り逢あひ、命いのちにかけて本望ほんぼうを遂とひさせんお案あんの内うち、其敵そのてきの姓名せいめい、夫れこそ鎌倉かまくらの武將ぶしやうへ、目見めみへなしたる源太左衛門げんたざゑもん、すりやろ森口もりぐちの源八げんぱちが敵てきとな、神かみの守護しゆごなす坊太郎ぼうたろう、

鹿略なき様心得たるか、恐れ有るは神誑神慮も叶ふ民谷が粹逐一
承知仕る、其返答を聞く上は、使僧も立し我等も満足、役目も濟ば象頭
山へ立かへらん、左島さらばと忽ちも姿は消へて天狗風とつと吹いた
る物音も、數多の家來一同も息吹返えて、傍りを詠め、只今の山伏の、他
言の無用、乗物やれ

○第七 品川宿の段

別れ有れば待つ暮有、色の諸分けや品川の宿入賑ふ本陣又は青柳左島
と關札を打たる幕の軒續き、若松村田大信濃大松坂屋と名も高き戀の
價の一やうも、九曜の星と七つ星五つ替りの店付きも、花を飭し新造の
欠は長き海道筋數も限らずとやと登る旅人下たり馬嘶く聲も溟
の音絶間も更もなかりけり、傾く日影、八つも過ぎ七つ斗りの小坊主が
往來の中をちよこ走、いたいけきたる旅姿、大松坂屋が店先を差覗

きく、こしそこよ居る伯母様達ちつと物が問いたいと云ふ稚子よ、そよ
風がチ見れば可愛らあひい坊様の旅姿尋ねたいとは何とじやへ、チ此所
の名い何と云いますや、爲り花のお江戸の入口、品川と云はいの、そんな
ら爰よ、松坂屋といふ女郎屋が有かへ、チ有る共く、そしてこな様の尋
るの、新松坂屋か大松坂屋か、チわしが尋るの、大松坂屋と云やんす、
夫れは幸ひ、其大松坂と云いこち亥やはいの、チそんなら大松坂と云い
爰かへ、チ嬉しやくとだんばこ檀箱上がつて店先へ、腰打かくれば、廻しの男
がつつと出、間こちの内を尋てきた小僧様、こな様の、何所からこんした、
さればわしの遠い國の者、聞き傳へた大松坂屋、女郎が賣て貰いたさは、
る、尋ねて來ましたはいの、といふよ、佐介は肝潰し、小人島の大盡で
は有るまいし、なんぼ廣ひお江戸でも、六つや七つの小坊主が、女郎買ひ
とい新らしい、成る程賣つてやるまい物でもないが、女郎を買ふて何よ

するのじや、夫れはな、たつた二人抱れてねてたんと咄しがしたい故
ませた小坊主殿、商賣の事ならおとち子供の差別のない、お前方の内
誰を一人、今宵一夜さ、子の守をすと思ふて、勤めて見る氣をござん
せぬかど、いへば皆口よ、私が勤めふ、わしがど、せり合ふ内よ、坊主
郎、伯母様わしが買いたいと云は只一人、名もよふ覺へて居ます、
お前方の名は何と云いますや、ませやの、わしが名を、そよ風、まがき、初
花と銘名乗れば、かぶり振、おれが尋る女郎衆の名、其朝と云い
ます、何じやお職様が買いたい、こいつらゑらひ望じやどふやらこい
つはうさんな小坊主、まよぼく、雨の降晩、ばつてう笠着て酒屋へ
行く、狸ではないか、そふでなくば、つきり街の種まきよ、遣はれる小坊
主め、其朝様よ逢はす事も賣る事もふならぬ、どつとしいねと立か
れ、そんな者じやない程よ、どうぞうつて下されいのふ、ならぬと

云ふよとびつこい逝すの儂さしい売くらはすと握り拳を振上れば始
終立聞共朝は影見せも走り出待て下され佐介殿賤しい苦界の身なれ
共、わしが名を聞き傳へ遠國から遙くと六つや七つの子供の身で尋て
来たどの子細が有ふ殊よけふの志の日よ當れば出家よ宿をする心、江
口の君よ有らね共假の舍も他生のゑん賣て下され買りたい、坊様共
朝と云ふのわしぢや程よきげん直してこよいは夜と共咄して遊ぶぞ
や、く爰へと手を取つて笑ひよまぎらす草鞋の紐解し今雷の逢瀬よ
何をかごどもかたるらん、佐介は一ゑん呑込す、何んぼお職の其朝様
でも、見ず知らずの小坊主を客よまてり、親方の手前がどふも、すむも
よごるも勤めの此身、始めて逢ふて、わまや惚た、惚たよよつて共朝
が身揚して逢ふ程よ、間夫は勤めの樂みと、粹を通えて何事もそこへよ
い様頼むぞへ、そふ始めからおつしやれば、親方の手前もさつぱりす

みの折れか木の端か、色事の用心なら氣遣のない小坊主客^{きやく}迄つぼりと
お勤なされ、とかふ云ふ内もふ七つ、サア、女郎様方、晝見せの先^{せん}のいおか
はりなされませ、是からの夜の体灯^{ていひ}を點^{てん}えては覽^{らん}え入れます、てん唐紙^{からかみ}
を押明けて、佐介の立て入れれば、跡^{あと}も皆^{みな}顔見合せ、其朝様の物好きな何
でも今宵はまづつぼりと、乳^{ちゅう}を呑^{のま}して上げなんしと、終^{つい}云ふざれもおのづ
から、虫が知らする親子とい知らぬ親造^{しんぞう}先^{せん}も立、大事のお客と手を引
きげん取と打連て奥の座敷へ、入^いりけり忘^{わす}るなよ程は雲井もへだつ共、
空行^{そら}く月の廻り逢ふ迄、折から表へすつたすた、息^{いき}を切てかけ來る奴傍^{やつとらたりに}
見廻し打黙頭^{うちうちづこ}、相圖^{あひづ}の礫^{つよ}ばらくく、夫れと出來る岩代傳内、互^{たがひ}も近寄り
小聲^{こゑ}もあり、相圖^{あひづ}の知らせの何事なるぞ、火急^{ひきゅう}の用事か何とく、何か
様子は存せね共、森口様より密事^{みつじ}の仕^し状^{じやう}、イサ、披^ひ見^{けん}あられませふと、首^{くび}も
かけたる狀箱^{じやうばこ}を、渡せば取て押ひらく、折も來合す馬士龜藏、夫と黙頭^{うちうちづこ}本

陣の塀へいも身を寄せ窺うかがふ共、知らぬ傳内一通を、逐一いちいちも讀終り成程なりほどく、先達て森口殿を預り置たる一品、今宵持參致せよと有書面の趣き、若懷中もしくわいちゆうして方が一、見咎とがめられての一大事と、人知らぬ所も隠し置た、折を見合せ某それがしが、明朝迄も持參すべし、其朝が實否じつやを糺たゞさんと心がける折節、思はずも坊太郎此所へ來りしを、最前ちらと見て置たれば、是も糺して委細の貴面と、先生もよく傳へよ、早行け、ハヤシヨ畏つたと入平の元來し道へ引かへす、思ひ寢の枕の下の梅川も、折から奥より遣手のお松、傳内様く、コレハしたり、さつきよから呼んでゐるも、爰も何してござんすへ、サテおれが爰も居るの、何さ、ア酔た、見通して皆のやつらも、寄つてかゝつて盛潰もろつぶされ、餘あんまり術うづささ酔醒し、風も吹れて居るのいやい、そりやよふ吹れて居なさるな、其朝方の傳内様、野風様の身請いよく、お前がなされますか、コトヤお松、夫の云がむだと云ふ物、傳内の金持、しかも今宵中も身請を

するの悦べく、左様なれば其様子、旦那様へも申させ、身共が亭主
も直に逢ふ、其身請の成まいと、すつと出たる馬士龜藏、誰かと思
へば先生も勘當受けた龜次郎、身のイがない故、馬士と迄成り下り、野
風も迷ふて此店も封じられた業晒し、何じや野風が身請のあらぬ、
おかまゝい、なせならぬ、先約が有る故、其客の何國の何者、
外でもない馬士の此龜藏、寶紛失の誤り故、其身も成てもまだ太平
樂、野風が身請の三百兩だぞ、馬士の分際で、三百兩の扱置粒三文の
才覺も出さやせまい、願の明いた任せいらぬ、いわゆる成程野
風が思ひ切りました、あなた様へ差上ませふと、犬つくばい、這屈
が、結句其身の爲と云物、お松、何とそふは思はぬか、馬追しても以前
の侍、殊も金も、浦物三百兩が尊ひ物でもないぞいの、面白傳内が身請の
たつた今、お松亭主左達を早く呼べ、ならぬ、何でならぬ、今

そつちよ金が有ても、先約せんやくの此龜藏證據かめざうじゆと云ひ此證文と懷中より取出す
の野風よやつたる手附てづの一札いちしやく夫を、夫から御覽ごらんじ、碑文谷いふんやですつ
ぱりと野風よやられた此證文、貰ふからこの物、何と是でも云分有
かど、手盛の理詰りづめよ、まじめ顔かほ、いまいしい、是が本の借屋貸しやくかておもや
とやら、能よいそんならまあ先約せんやくよしてやるの、跡金あとがねのいつ出来る、其
跡金あとがねの今宵の月代しよ、きつと身請みじをして見せうといふよ傳内指折うぢさて待て
よ、今日の廿三日、月の上るの夜中の鐘かね、夫迄このころよ埒明あちかね、野風が身請みじの
此傳内このついで、お松詞まつことばをつがふたぞ、成程心得なりほどましたと云ふ物の、夜中迄このころよ龜藏
殿どの、何事も胸むねよ有あ、そんなら一所いここよ奥の部屋おくのへや、遠慮えんりよ有る爰こゝの内、夫の内
證手しよて附つけの一札いちしやく有るからは、身請みじの諸埒しよち付迄このころ、お二人共大事だいじのお客きやく戀
よ上下じやうげの隔へだてはないと、粹まことな遣手ぢやての取捌さばき、夜中の鐘かねの鳴る迄このころ、女郎集おんなあひだり
めて酒さけよせよ、そんなら夫迄このころお二人様、後のちよ逢あふ、お入りなされませ、か

けてかいなき、夢のうき橋かゝるとい、人のえらじなともすれば、音信渡
るおぎのうの風、黄昏時を幸ひと潛待たる本陣、兜頭巾は忍びの出立
大松坂が見せ先を窺ふ時も夕間、幕奥の騒の折よしと忍ぶ下部屋一面
は輝く燈火、萬燈も是よりは過じと、賑のしきうさといふ、其言の葉も我身
ぞと野風の傍りの目を忍び、可愛男は添ふ事のならぬ浮世を捨草の露
より、脆き命ぞと覺悟極めて奥座敷、襖をそつと立出て今お松殿の咄し
を聞くよ、今宵月の上る迄は身請えやうと言えやんす、龜藏殿の一時蓮
れ昔の昔今の身で、三百兩といふ金が、どう才覺が成物ぞ、いやな男の金
でせき、思ふ男の儘ならぬ、思へば思ひ廻す程金が敵の世の中じやなと
又今更な越方を思ひつゞける表より、往來とだへぬ仇口よの高くと、大
師さんのお闇を日よの幾度占やさん、歌のうき世伊之介、若菜屋の若
くさと浮名の立た新内節、昔も今も金故より、つらひ辛苦をする事じや

なア、憎てらしい博内も身を任そらよりいと、覺悟極めた此身も、今一度逢たい龜藏様、逢たらけつく未練がおころふ、つともふ爰へ來ていやえやんすと知りながら、逢すも死る私が心可愛と思ふてくれ、もは回向頼み上まする、お前の随分身を大事も實の有所詮議して、元の此身もは出世有千萬年の壽命過ぎ、みらいの一つ蓮ごと跡の涙の忍び泣き、思ひ出せば七年以前、箱根の湯本で龜藏様と取かひせし此割筭番ひ放れぬ鴛鴦の摸様も、今の空事とまたも、涙よくれけるが、漸心取直しせめて一筆書殘す、今ぞ此世の名殘ごと、傍へは有合ふ硯箱、涙の水もする墨も薄き、此世の別れ路や、朝顔の盛り憎し迎ひ、鴛夜のみつ虫ちんく、ちろり、見へつ隠れつ、かくれんば、始終の様子、其朝が見る共知らず、用意の剃刀取出す、其手をまつかと野風様、お前の何で死なしやんす、其朝様か、何でとは身請のせつば、今宵もつゝまる身の因果放

して殺して下さんせと、振切手先の剃刀を漸もぎ取り、これおぼこな子
でい有るいな死で花實が咲ならバ比翼塚も咲いいな全盛も替
へ身もかへ夫程せまつた事ならバ姉女郎の此わしよなせかうく
ど打明けて相談して下さんせぬ聞へぬ野風様、どの云ふ物の、誰し
も苦界する身よい覺への有事、思はぬ客のまげくよ、來る夜くの憂
苦勞笑ふてつらき其中よ、泣て嬉しひ首尾も有り樂しむも戀苦まむも
男故なる憂苦界、互のうさも打明けて咄え合ふのが傍輩中殊もお前の
苦勞よさんす、龜藏様の身の上は、知ぬいて居る此其朝、譬どのよふな事
有迎夫はしたのふ親方へ耳ふく様なわたしじやと思ふてお前は隠す
のか、野風様聞へぬと、詞は直な其朝が、恨は眞身の兄弟増り、野風は嬉
しさを合せ、まみくとの其お詞、そふ云ふお前の心どの知て居なが
ら隠したの、せきよせかるく此身故、逢れぬ首尾を高輪で忍び逢たが、科

と成り、有とわられぬ折檻は、氷の地獄火の車、劔の山を登る共、男故より厭いねど、只悲しひに逢ふ事、ならぬつらさも重る難義、傳内づらが身請の相談、今宵もつゞまる身の覺悟、哀れと思ふて下さんせと、跡の詞も泣入つて涙流れの一筋も戀も迷ふぞ、いぢらしき、其朝わざと打笑ひ、去り迎は狭いぞへ、爰バつかり又日日照ぬいさ、今宵の中も欠落して、何國の浦も身を忍び、時節を待つがよかるぞへ、幸ひ龜藏様も來ておれば、密に談合、お前の部屋で、斯くと呷く戀の傳授事、奥義傳へて悦ぶ野風、何よも云はぬ忝ひ、死でも忘れぬ其朝様と伏拜む手を引分けて、そんな事云ず共用意さやんせ、此并や書置も私が預る早ふくくと、ほれたる草も水打其朝が進め、いさくいとくと、野風の立て入る跡を見やるこなたへ新造が、はこぶ寢道具敷ならべ屏風、引問も禿共、サアくお出と小坊主客、手を引出れば、待兼た大事のお客、今迄何所も遊ん

でぞ、ツイわしや此振袖の姉様とあつちの座敷で目隠しまていたればな、
モウ床入をさす程も、早ふこいといはしやる故、嬉えうてく連立て來ま
したはいのど、聞てよつこり、かほんは嬉しひ今宵の逢瀬、皆の衆や、
そなた衆も用はない、奥の座敷へいてたも、用が有バ呼いいのだ、云れて
新造禿共、珍らしいお床入、戀の手取の坊様客、必わやく云なへど、笑ひ
をまほまうはぞうり廊下、バたく打連行、跡見送りて、其朝は讚岐も殘
せし稚子の、面ざしよ似り似つれ共、道夫れぞと問れもせず、人目あけれ
バ手を取て、お前も年端もいかぬ身で終え見もせぬ此わしを、尋て
爰へいござんしたぞ、そして、様か、様も有ふのよ、いたひけな子
を手放して、あぶさい事やといふり、若やの詞の端、胸も答へて坊太郎打
戻ぐみ聲くもり、か、様も有たれど、三の年別れて顔も覺へませぬ、そ
んな事問ず共、お前が本の其朝様でござるか、夫が早ふ聞たいわいなふ、

「わたしの本の其朝じやが、左程まわしを問えやんす。お前の國の何所で、どし様の名の何と云うお方じやへ、わしが國の讃岐と、様の名の民谷源八、お前の名の坊太郎といやせぬか、おれが名は坊太郎、そんならわしをあなたのかしじやないなふ、かゝ様でござるか、逢たかつたわいのふ、道理じやわいの逢たかつたわいのふ、道理じや、逢たかつた道理じや、くくく」と引寄せ抱上げ抱きしめ、嬉し涙まくれけるが、漸く氣を押しづめ、稚けれ共、さかしいそなた、此母が徒で二度の勤めとさげしみも恥しさ、一通り聞てたも元わし、此里の流れの身、源八殿は請出され國へ行き、そあたをも設じ、悪人の仕業、又、あかぬ離別も上への云譯、時節を待てどのお詞の末を力、又此里、つらひ勤めの其中、まも風の便りを樂えみよ、いつか、と思ふ内、源八殿の人手よか、しり果給ふと、聞て胸り身も世もあられず、其時のわしが氣のどの

様も有ふぞいのふ最期所のかはる共死出の道連せん物と思ひ誦しが
待て暫し今の命を存へて再びそなたも廻り逢ひ夫の敵父の仇討せて
本望遂ん物と惜からぬ命存へて今廻り合嬉しさい天道誠を捨給はぬ
親子のきゑんと斗よて語るも先立憂涙坊太郎も目を摺こすり願様
爺様が死まやつた故わしも屋敷を追拂われ夫から乳母の在所の盤谷
村も居る中志渡寺の方丈様が養ふて出家も成てどし様の跡訪どかつ
まやつたが出家のいやしやわまや侍じや親の敵が討たさお寺を出た
いばつかりも啞の真似して居ましたのを乳母の誠と苦もやんで金毘
羅様へ三七日の間火の物断とやらをして夫でも物を云ぬ迎自害して
死ましたはいの乳母は死もやつたとや可愛やな源八殿の
最期を知らせた後は便もなし不思議事やと思ふたも扱ひそふで
有たかいのふ誠の啞と苦もやんで命を捨ての願込めどの忝ひ共嬉し

い共、何と詞よ盡されふ思へば、夫と云、忠義一圖の乳母迄も非業の
最期と聞事い、いか成るすくせの因果ぞや夫の最期を聞く迄い、そんな
こと共露知らず、海の表を見るよさへ浮沈ある帆かけ舟、讃岐へ行が浦
山しや、今日の迎ひの便りも有か、翌日の迎ひの人もやと日をかぞへ指
を折り待ち、こがれたる甲斐もなふ逢れぬのみか、剩さへ劍よかより
最期とい神も佛もない事かと涙の限り聲限りくとき立、正体もな
く伏沈む、やと有て顔振上げ、坊太郎もなたの顔見た嬉しさも、尋る事
も跡や先、わしが爰も居る事を、誰も聞ておまやたぞ、夫の伯父様の
云まやるよ、青柳左鳥様といふ、江戸の殿様を頼んで、坊太郎も敵を討
せといふ、金毘羅の夢のお告、幸ひかゝ様も江戸も居てなれば、連て行て
逢せてやろと云まやつたが、早も連て来て下されぬ故、わし一人隠れて
内を出たれば、終も知らぬお山伏が、此江戸へ連て下つて、おまへの名

も所も敵へて、爰の門迄ござつたはいのよ、其お方の何所よござる、何所へござつたか知ませぬと、聞てふしぎの其朝が、思ひ廻せば廻す程、乳母が忠義を哀れみて金毘羅様の作利生かや、勿体なや尊うとやど、伏拜みく、只手を合す斗なり、神の守護有る我子の大望、本意を遂るよ、疑ひなしと思へど態と聲勵し、坊太郎稚き身よて健氣も、敵を討んず志、出かえやつたく、去ながら、其敵の何國の誰と何を證據よ本望、遂ん、若や敵の手かゝりも聞さるかど問、我子心の器量、試すも、遺母の慈悲、尋よこて、懐より、帛紗包を取出し、國も居やえやる伯父様が、是を證據よ敵を討てと下さつたど、渡せば取て打詠め、是は是、刀の割筭、摸様の水よ、鴛鴦の片し、是を敵の證據とい、夫がど、様の死骸も添て有たといな、何ア、是が、最前野風が噂した、龜藏殿より取かはせし大事の筭と、云た摸様も水よ、鴛鴦若や夫れかと預りし、筭取出し合せて見れ

ハまつくりと。つがいはなれぬをし鳥の合紋、嬉しや忝なや、坊太郎
悦びや、夫の敵が知れたわいの、ヤアとく様の敵が知れたと、其證據の
此并、一對揃ふ出所は、奥に居るア、馬士本名の森口龜次郎今宵思はず此
所へ、道引給ふも神の比利生、本望遂るの今此時用意く兼て暗守り
刀、渡せば取て稚子が腰に遺は、武士の妻引上げて身繕い、其身も嗜一腰
かい込、悦びいさむ親と子が天にも上る心地して、奥へ入らんと欠出す、
向ふの間よばた付く物音、障子よばつと立血煙、何事と押開け、内
よむざんや龜次郎腹十文字よかき切て、苦痛こたへる其有様、野風の介
抱泣涙、親子の胸り驚きながら、右と左へ誥寄りく、身怯なる龜次郎、
我々が咄しを聞き事顯れしと覺悟の切腰、尋常の勝負のせす未練
の最期見苦ま、聞より手負の聲を上、身怯でない未練でない、最前よ
り稚き者の孝行心、其朝の物語を聞くよ付、持べき物の妻子ぞと感す

る餘り敵ぞと、我と名乗て討れん覺悟、サテ寄て首取れど、刃を持つたる健氣の顔色、云、よや及ぶと親子はつゝ立、既と討んと振上る、ヤヤ、兩人暫く待てど、聲をかけて立出る青柳左島、忍び裝束引替て羽織野袴立派の骨柄、其朝は氣をいらち、夫の敵父の仇討をどゞむる其元は、某こそは青柳左島、ア、お前様が青柳様か、又其左島様が、何故お留めなさるしぞ、其譯を云い聞さんよつく聞け、金毘羅權現の告も依て、坊太郎を召連ん其爲も、どくも入り込み始終の様子に聞いたるぞよ、心得ざるに其隠藏、敵と名乗の子細ぞ有んど、云も手負のせき立つ顔色、弁の證據と云い、命を捨て名乗敵源八を討たる者外もあし、心得ずどの鹿忽なりと、云せも立てず、鹿忽どの慮外千萬、誠の敵は森口源太左衛門とあらたも蒙る神託も争ふ汝の、何者ぞと、拔さしならぬ敵の本名、聞て親子は二度恟り、どふ云事で敵と名乗我もと討れんどの、様子ぞ有ん其譯の、何とく

と尋るよぞ、手負かひの苦くるしさ押隠おしかくし、青柳殿の詞ことばと云い、旁かたわらの不審しん尤なほ元拙げんせつ者ものの森口源太左衛門が弟、龜次郎とす者、いかされば肉身にくしんの血ちで血ちを洗ふ其筈是成る野風へ遣つかりせしは七年以前、殿箱根へ御入湯某も供若氣の至り野風又迷まよひし身の誤あやまり、其後預りの硯紛失、云譯立す切腹又極たぎりしを、民谷の身み又替かへは訴訟そとせうす、夫おとこよりも長の御暇、寶の硯紛失も傳内が仕業しわざならんと、身請みまが又事寄せ、此内へ入込しも詮議せんぎの爲ため、我われ追放おしなの其砌みせ國くに又殘せし筈の片かたし、源八殿の死骸がい又殘し、仇あだを我われ又負おしせんとり、又、卑怯ひけつ未練みれんの兄あにが仕業、肉身みならぬ敵たてと敵たて、家名かめいの恥辱ちじよくを殘さんより、兄あにの惡事を身み又引受敵と名乗討れんと、覺悟かくご極たぎめし我切腹又一つより、以前某が一命助けくれし民谷の大恩、我敵と名乗討れさば、坊太郎が歸參きさんも叶かなひ草葉くさばの影かげの源八へ、責せめてり少すくの恩報おんぱうと、思おもひし事も水みづの泡あは斯顯あはれし兄あにの惡心、天道赦し給はぬ所、寶の詮議も得仕し遂つひす敵たても得成ならず、米

死したる残念と、イく野風斯迄武運よつきたる某未來も噫や闇のやみ
思ひ出さば一遍の回向を頼むと云聲もせぐり苦敷息遣ひ、聞て野風の
せき上く、お前も添ふと樂しんでつらい月日のうき苦界、そんな悲し
ひお詞を聞逆何の待ぞいの、一所も死と只一言なせよ云ふてり下さん
せぬむこいはいのかきくとき絶り歎け、其朝も、吸取る涙諸涙なみ
たし、品川の、あすの水かさや増らん、親子の、氣を取直し、思ひ
ぬ歎きよかくれたり、誠の敵知れたる上、猶豫する所でなし、サく用意
と、勇むを青柳押留め、今敵を討時よ非ず、神託蒙る此青柳、民谷が横死乳
母が誠心、今宵品川よて坊太郎に廻り逢んず御告も、正しく違ひぬ此有
様某も任せ先づ時節を、相待べし、警森口、摩利支天の術有共、我金毘羅の
神力を頭よ載き、青柳流の奥義を傳へ、父の敵を討せん事、我方寸の内よ
有、コく必氣遣無用ぞと、詞の末世よ云傳ふ、柳の緑紅の花の東よ輝け

る武門の譽ほまれぞ隠れなき様子聞たる傳内が左嶋覺悟かくごときり付るを、かいくつて突放せば心得かかげ欠寄坊太郎後より切付る、さまつたりと飛び違へちがへこびつちよがまほらしきほでてんがう、相人あいにんのいおとまげなけれとばらしてくれんと付入を、ひらりと庭へ飛で折しも、見がゞれ出る月汐しほの光りあかり又うつる電光石火でんかうせくわ神力しんりきをかゝる稚子わらわこの尖すまき太刀たち風かぜあしらい兼かみ逆さかる傳内でんない後あとを只一刀ただいちた又小腕こでうでの働はたらき、天晴あつせし見事みごとと青柳あおやなぎが褒美ほうびの詞ことばも人も感かんぞ入いたる其折そのせから不思議ふしぎや水氣みづきせい〜と、水卷みづまき上ある其有あり様さま猶なほ豫坊よぼう太郎たろう青柳あおやなぎ左嶋さじま守まもり詰つめて、怪あやしや今坊いまぼう太郎たろうが傳内でんないを切捨きりすれ血汐ちほの穢土けがれちち中ちゆうへ落おれおつゝ漲みぎる逆水さかみづ不淨じじやうを拂はらふ此有こゝ様さま扱あは、此手こゝ水鉢みづはちの邊へみこそ、怪あやしき事ことや有あらん、坊ぼう太郎たろう土中ちちゆうを改見かへみるべしと、差圖さしづ又また、立寄たてよて小腕こでうで又また堀出ほりだす土中ちちゆうを、怪あやしと取出とり出し青柳あおやなぎ又また渡わたせばとつくど見改みかへ扱あこそ、先達さきだちて紛失まがししたる松影まつかげの視隠みかくし置おしは是正これただしく傳内でんないがまわさあ

らんヤ龜次郎トウゴ悦よろこべ、寶たからの有あ所知したるぞ、丸龜家へ送る迄しばらく暫しばらく預あづかる此左島坊太郎が働はたらき故ゆゑ紛失ふんじつの寶たから出でる上うへ、龜次郎が最期さいごの迷まよひ今いまを晴行はれ月代しろの詞ことばを立たる冥途めいどの餞別はなわけ受取うけとれと指さ出す一通野風いつうののが取とりて押おし開ひらき、コトヤコレ其朝あした様さまと私わたくしが年季としよちう證文しやうもん、ホ、チ身請みまがの時とき刻くわ違ちがへぬ、龜藏かめぞうへ左島さじまが寸志すんし勝手かたて次第しだい又また未來みらいの追善つひせん、其朝あした迎むかへも身儘みま又またあり、コトヤ時節じせつを待まちてと、殘のこる方かたなき情なさけけの詞ことば、有あ難がたやと伏拜ふせがむ悲かなしい旅立たびだち目出度めでたい門かどと出で、おさらばさらば、と立出たれ、表うらは扣ひかへし諸同勢しよどうせい、早はや立たちと供觸ともふは駒こまのいな、き響こもの音里ねりの名殘なごりと女郎共ぢやうらゐども銘めい送くる、客きやくならぬ、左嶋さじまが抱いだく坊太郎ぼくたろう、駒こまよひらりと乘のり振ふりも、やつちやくと母親ははが思おもはず引添ひきそ響こもづら、見送みおくる別わかれ行名殘ゆきなごり、左嶋さじまが預あづかる稚子わらわを、守護しゆごなん神力しんりき金毘羅こんぴらの利生りせいは、末世まごころよ隠かくれなき

○第八 並木馬場の段

並木の馬場の人群集押合いへし合いゑいゝ聲、松の嵐よ音添て賑ひ
しくも又潔よし馬借權助聲をかけ、ゴレくいつもの通り九つ切の約束な
れば、稽古の是でお仕舞なされさらば馬代を致そかい、いかよもく、日
脚を見れば午の刻馬の借賃猿が餅、面を渡して又明日こふさらばくど
立かへる、春の日脚の長嶮、ざわめく女中の一群の青柳家の奥方蘭の方
家よ、繼木の若みどり坊太郎を伴いて神へもふでの道直よ、歩行姿の柳
腰風またゆとふ風情なり、惣共口よ、すゝ奥様、爰が鶴か岡の並木の馬
場お館からはよつほどの道お乗物をやめておひろひ、嚙おしんどふと
ざりませふど、いへば、傍から夕しもが、くかちがけつくお氣はらし
お館での四角四面な殿様のお顔の外生の物の見る事ならぬ、こんな時
が眼の正月、今雪の下ですれ違ふた、色白なくつきり男わえやおもわく
むやどはのめけ、蘭のかた打笑み給ひ、そち達が仇口よ、心もいと春

の詠め、道の行くての梅櫻、盛りぬ即ち坊太郎が武運も開くけふの社參、
置ひかひ民谷が子なれ共今鎌倉まがらよ並なき劍術けんじゆつ無双むさうの達人たつじん、青柳家の若殿と、
もてはやさるゝ此子の果報くわほう、皆の者もあやかれど仰を照葉が引取ひきて、
や、是こゝよ付てもすつきり合點の行きませぬぬ、殿様左島様のお心、現在げんざい御
實子じつこの采女さいにょ様を、吃はらの新平殿しんぺいよ養子やうしよおやりあさつて、坊太郎様を御
實子じつこよあされたはどふした事でござりますへおつから、自みづから心こゝろぬ知ねど
あんまりな思ひ切母のよくめかしらね共朝夕武藝ぶげいの稽古けいこよも追おひ爺おや
はの胤程おつち有適器用あつちきようと思へ共殿の心こゝろの裏表うらおもてなんぼう武術ぶじゆつを教へても所しよ
詮役せんやくよ立ぬ青柳の家いに繼つされぬと若黨わかつう風情ふうじやうよ追下おて親子の名乗なをりの叶
はぬといひむいと思へど日頃の氣質かちそち達も其通りたどへ途中で逢
たり共若殿様の采女さいにょ様の言ふ事ことならぬぞよ、夫おつハ格別坊太郎けふの
道も餘程よの事そなたの應草臥おとくたひ、下向かよの乗物へ乗りやつたがよいぞや

く私ワシのまんどふいござりませぬ母様のお慰み乗物のりものの此馬場このうまばで此程このほどの稽古けいこのはげみは覽み入いれたふござりませぬ、よふ云いやつた出いかまやつた道みち殿とのの教しゆを守り片時ひととき忘れぬ稽古けいこのはげみそふのふては叶かなひぬ筈はず幸さいはひけふの此鶴このつるが岡おかへは代参しろせまとして我夫わがつま左島殿さじまもは出いなれば、一段いちだんと能心のうしんがけ、誰たれか有馬引うまひきけど、仰おほふはつと馬口ばくちう勞らうが引出ひきだす馬うまのくつわづら、取付とりつけく權介坊太郎ごんけいぼうたろう又添まふて遙はるかの馬場先うまばりへ行い後影ごうかげこし元共もととも伸上のびあり、ア、馬うまへ乗のりなすつた手綱たづなの持樣もちよう腰こしの備そなへ天晴あつせれおどなも及およばぬ、やつちややくと一同いどうも譽こほる聲こゑと、なまめかし、かゝる折せりからまづくと來きるも同おなし年の頃ころ、若衆仕立わかしよじだての子こを引連ひきつら出來いる若黨新平わかしよにへいは生得吃せうとくくちの薬病くすりびやうも五体ごたいかけても一心いしんも守まもり育そだて主人しゆじんの胤忠義ゆんちゆうぎは一圖一筋道いちずと並木ならぎの馬場うまばも差掛さしかる夫おとこと見るも必共かならずとも、あなたは若殿新平わかしよにへい殿とのぢやないかいのど、聲こゑかけられて、コ、コ、奥樣おくさまはつくと、頭あたまをさぐれば采女さいによはかけ寄よ

り、母様なふと取絶るを、新平引留引留、コト何事とせいすれば、惣共惣共は氣の毒
がり、幸ひあたり又人ばないちつどの間の親子は様、お傍そばに置いて上げさ
んせと云いを奥方留め給ひ、コト惣共惣共何いふ親子とは誰が事、そ
こよめる其子のナアヤ新平が惣領息子、此蘭らんの方が子といふは坊太郎よ
り外ほかもあい、尤始は左島殿と、自らが中ちゆうもふけたる、大事のく子で有
しが、弓馬きうばの道が疎そい故新平が子よやつたれば、今では親でも子でもな
い、若黨わかどう風情の子の身として、自を母様との慮外りよぐわいなやつと呵しかる眼まなこも、恩愛
の涙はらくく、傍そばも聞きぬる新平が、胸迄せさくる涙をば、玄つとこた
へて喰い玄ばれば、采女は只うろくと、コト新平、今から弓や馬を精出
して、適あつたれな侍玄やと譽ほめられる様もする程も、かし様の子玄やといはしや
る様も、どふぞ詫言わびごとしてくれいと、膝ひざも取付泣きければ、新平涙を呑み込
く、お出でかしなさつた、出でかさ玄やつたはい、よふおつしやつた

弓や、馬を、は鍛錬なされたら、此奴めが請合ふて、青柳家の若殿
様と呼せます、其受合ひ、奥様、受合ひで何とせふ、弓や馬を精出し
て、人又適譽られたら其時こそ、眞實眞身の我子じやもの、若殿と云さ
いで何とせふ、何とせふぞいのふ、そんなら違ひいござらぬかや、嬉し
い、新平、けふ此馬場で馬責させうといふて連れてきたでないか、
早く早ふとせり立る稚心のいちらしさ、わつと泣たい所をば、こたゑる
二人が血の涙、ぬれ共も諸共、涙涙ぞわりあけれ、斯ていはてじと新平つ
つ立、そんなら馬に乗せせふ、さうござれ、奥様おさらば、そんなら餘
所の子、随分健で、怪我バししてたもんなど、かきたくる程何やかや
云いたい所いはぬい云、彌増る涙、かくして泣くも見送り、見返り別れ
行、まばらく有て馬場先、手綱かいくり乗出す、はあなたの衣紋はなやか
又、出立青柳坊太郎濃紅の鉢巻、花紫の肩襷、驛毛よ白泡、かませえんづ

く、と打せたり續て采女がり、敷も、同じ振袖たぶやかまないませの
鉢巻しめ、とんぼう結びの花襷りんくりに敷目の内も栗毛の駒も打
乗て並木通りをまどく、かつしくとあゆませて互ひも地乗のき
ざみ足備へも前後も乗連く、乗廻す透を窺ふ坊太郎振かへつて聲を
懸け、くや采女様同じ菟乗り所望と見へきそひ給ふはやさしいが、ほ
覽の如く手馴ぬ荒馬、近寄つて怪我有な笑止くと呼わつて逸散かけ
んづ其勢ひ、い、いかめしき先がけ呼り、傳へ聞宇治川の先陣は、梶原
佐と木が争ひ、馬の腹帯も水底の綱切り流すも謀劣らじ負芝と夕白
影天よもあがる、勇のかけこへ、障泥を打合せ蹄を飛ばす雲霞白砂蹴
立、かけさずれば、かけ出る新平飛立心地、左右の中へわつて入かけ、牛
角く、是でくと竹も狭みし極取出し、松影も立て置て弓矢を渡
せば面白え、望む所と面と追つ取、又乗戻す鳥居前、新平は只ぞくと

現うつみなつて見みられる中、又もかけくる馬煙四足を宙そらへ乗飛のりばす、馬上ばじやうよつがふ白羽しろはの矢や双方そうほう一度いちど引ひえぼり、切きて放はなせばあやまたず的まとをはつと打う抜ぬけて遙はるかへ行衛いんの白羽しろはの矢や先勝負しやうふなれば残念ざんねんく、二ふたの矢やも引ひかへせば、兩手りゆうて又また懸くえやんと留とめ、勝負しやうぶの牛角ごうかく中なかよし、けふの稽けい古この是切しりと新平しんぺいが留とめれば、兩人馬りうにま々まかり立て、襷取たすき袖扇そであふぎあふぎ立たつれば空そらを吹ふく、稍しちやうの風かぜも招まねかれて、暫しばらく息いきをつぐ所ところへどつばい眼まなこの雜人ざわにんばら、五ご六りく人にん走はしり付射ついで人にんの知しれたと無な二ふた無な三さん、二人ふたりの子供こどもを引立ひだる、驚おどろ新平しんぺい物ものをもいはず、雜人ざわにん原はらをはりのくれ、代參だいさんの森口殿もりぐちのへ矢やを射やりかけたる二人ふたりの小悴せうさい、引立ひだる邪魔じやまひろが、却かへつてうぬもが身みの上うへと、聞きよりはつと新平しんぺいが油斷あぶらたんへ付込つぎ雜人ざわにん原はら、寄よてかゝつて踏ふこかし二人ふたりを引立ひだてかけり行い、いづく迄どこまでも新平しんぺいが跡あとをしたふて、行空いんくうの、日影ひかげまばゆき、繩目なわめの耻はぢ鶴つるが岡おかの拜殿はいでん、二人ふたりの子供こどもを引ひすへさせ矢やを引攔ひきとんで立たたる森

口新平の欠來り二人の子供を押圍へば、源太左衛門はつたどねめ付、鎌倉武將の代參たる某が乗物へ過ちなせし二人の悴打はなすそと退と、抜かゝる刀の鏢元、丁ど來かゝる青柳左島鹿忽なり森口殿、此社の鎌倉殿は武運を祈の靈場血をあやめて、後日の咎先つせかれぞと押留むれ、バキは代參の某へ矢を射かけたる二人のやつばら、たとへ貴殿の子息もせよ、今討放すが何としたり、留立をさつしやる、何か、貴殿の云付だか某へ意趣バしとざるか、意恨バし有るのか、是は又森口殿の詞共覺へぬ弓すれ共寐鳥を射ず、飛道具を以て人をあやめる、比興未練な青柳あらず、口廣ふ云はれな、今日某の殿の名代、代參ぞやぞ、其乗物へ敵たふやつばら、打はなすが何としたり、いかも貴殿へ射かけし、二人の悴の内、され共いづれが當の矢と、明白ならぬを一がいよ、討ち取ふとは無法千万、無法とは何が無法、射人の二人矢の一筋、い

づれが貴殿へ射かけしぞ、夫、夫でも天下の掟でござるか、夫、
得とほ思案召されたがよふござらふ先夫迄の二人の悴此左島が預つ
て急度評定相待ふ、まからば貴殿へ預けたぞ、披露が濟で首切る時ほへ
づら召れ、と森口が、心の工合打違ふ、色目をみせぬ式禮目禮非禮を
請ぬ神の庭引別れてぞ

○第九 青柳屋舗の段

武家繁昌の時津風枝をならさぬ青柳の景圖いみまき其譽普く四海よ
はびこりて、みつればかくる世のならいせ、泣は子故の鶴が岡坊太郎采
女があやまちを、けふは裁判有べしと殿登城の留主の内、云渡さねどお
のづから、事穩便又見へまけり、何所の屋敷もお定り苦のないぬはま
共一つ所又寄集り、彌生、此春のやどわり又瀧野屋がお染を見よど、は
づみ切てゐる矢先、かけの矢がそれたどてお館いらんさわざ、えんき

な事玄やないかいの、ア卯月の慾な事斗りそなたのあの顔見せよ、おも
入れ顔を見やつた玄やないかいの、夫より私が氣のもめる事聞てたも、
紀伊の國やが病氣玄やと聞て身も世もあらればこそ、これが死ふと玄
た所、春狂言よふきや町へすけよ出るといふ噂、嬉しやと思ふ内よい
事よ、寸善尺魔、あたしんきなどうはきとし色よなまめく高咄し、もれ
聞へてや一問より、時めく花の蘭の方、かほりけたかき打かけさばき、と
はしたない女子共、今の高聲何事ぞ、坊太郎采女が身の上よ心をいため
る自が辛苦ハ皆も知る通り、假そめならぬあやまちは鎌倉武將の代
參、森口殿の乗物へ矢を射かけたる其咎けふ殿様の、登城が二人の子
供の身の落着裁許、いかゞ成る事と玄バしも心休らぬ、いづれ子を
持つ親心、といさぐさめてせめての事、力よならず共なせ穩便として
くれぬと道理をせめてのは、阿、妙共の一同よ誤り入て手持ちさく皆こ

上首尾く、鎌倉殿の証言の左島かたいく、とかく浮世の色と酒
夫から出来た出来心北國さしておせく、見せのすがききてんとたま
らぬ、久しぶりで三つぶとんずい程ぐちな、口舌のもつれ、さらりと柳よ
流して仕廻い、纏三味線をかよ取て、盃よ向へば違ふ人心、是のい
つよないほきげん、其事でいござりませぬ、二人の子供がけふの落着、
流矢で怪我させたの座頭の傍杖入つあたり通りかすつた身のふせう、
まだ骨もかたまらぬ拳で射かけた矢は的を越乗物へ立たるとい、弓勢
尖き其身の躰れ、お上よも殊の外の賞美、殊更かたき、何どかたみ
の取れた捌きぢやないか、そんなら前いさつぱりと、濟だよよ
つて連て戻つた、二人共誠の武士よ、覺束ない、我夫そりやお詞が違
ひます、今おつしやつた二人が弓勢、其弓勢よ古事來歴、餘り口きいて
陋が干瀧、ぢや坊太郎茶をもて、采女たべこぼん、二人は次の間の臺子

の泌^{たぎ}たばこぼん左右、一度も持出る顔つくくくと、奥^{イダ}誠の武士でない
と云い、ナ誠の武士の命^{いのち}が的^{まと}矢^やがそれて人を過^{あやまち}其罪^{つみ}を遁^にた迎^{むか}愧^かぶが、先づ
未^み練^{れん}上^{じやう}若^{もし}も咎^{とが}有^あり腹^{はら}かつさばいて死^しふといふ性^{せう}根^ねがなふて、誠の
武士より覺^{おぼ}束^{つか}あひ、イヤく殿^{との}様^{さま}我^{われ}の命^{いのち}おしみの致^{いた}しませぬ取^と譯^{やく}けて此
坊^{ぼく}太^た郎^{らう}目^め指^さ漱^{しゆ}と、もふよい、二人共^{ふたり}耽^{しか}とそうかど云つゝ目^め先^まへさし出
す火^か皿^{びん}、ハット思^{おも}ひすたぢろく采^{さい}女^{によ}、夫^{つま}で誠の武士で有^あるか比^ひ興^{けう}者^{もの}めと
叱^{しか}るし、子^こも傍^{そば}も聞^きく母^{はは}の胸^{むね}も燒^や金^{かね}刺^さるし心^{こころ}地^ぢ、切^き戸^こ口^{ぐち}を下部^{しもぶ}の浮^う助^{すけ}、
椽^{えん}先^{まへ}へかつつくばい、年^{とし}の比^ひ三十^{さんじゅう}斗^との女^{によ}めが、三^{さん}味^みをべんく引^ひ立^たて、や
んらめでたや、おめでたや、お目^め見^みへ願^{ねが}ふとぬかず故^{ゆゑ}、呵^{しか}退^{たい}てもお目^め出^でた
や、若^{もし}も聞^きくもやと窺^{うかが}へば、此^{こゝ}中^{ちゆう}へあられもあひ、物^{もの}取^とせて早^{はや}ふいあまや、
待つゝ三^{さん}味^み線^{せん}どの面^{おもて}白^{しろ}い、奥^{おく}のともあれ某^{たれ}が所^{ところ}望^{ぼう}する、苦^{くる}しうない是^{こゝ}へ
通^{とほ}せ、答^{こた}へて表^{おもて}口^{ぐち}、氣^きも浮^う介^けの立^たて行^い、子^こをまたふ夜^よの鶴^{つる}かや鳥^{とり}退^{たい}り、

免めんを受けて小編笠あみがさ彈ひ三味線の音ねじめ能ね、やんらめでたや、やんら嬉うれしや、千
宏ちひろよ万まんぢよの鳥追とりおが参まりて、我子わがこの儀ぎ禮れい中ちゆう宿しゆくかしまします、儀ぎ家けの
惠めぐみ其子そのこも豊ゆたかよいん、唄うたふ内うちよも我子わがこのかた、見て見ぬふりの笠がさの内うち、遠とほ
目めよ夫おとこと坊太郎ぼくたろう、なふかゝ様か我子わがこかといふよ云いわれぬ胸むねの内うち、涙なみだよむ
せぶくもり聲こゑ、やんらかなしや、やんらきもせや、千宏ちひろよ万まんぢよの鳥追とりおが
参まりて、我子わがこの難義なんぎを申し、命取いのちとと申ます宿しゆくかしまします、お家いへのお子こも榮さか
我子わがこも助けいん、思おもはず女子氣むすめの泣なこへ粉こならす左島さしまがまいぶき、出で
來きたゝ面白おもしろ、心を込こめたる今の唱歌うたが子鳥こどりよ引ひるゝ親鳥追おやどり坊太郎ぼくたろう、能見みえ
たか、奥おく随したが分わかいたりめされ、我わがも此間こゝよ巢籠すだもりと心を込こめて立上たる、胸むねの万
里ばんりの大鳥おほどりや、二人ふたりの子供こども引連ひ連れて一間いっけんの、内うちへ入いり、夫おとこの詞ことばのはしゝ
を、思おもひ合あせて蘭らんの方坊太郎ぼくたろうを産うむの母はは、遠慮えんりょのない、こちへ、ハッといへ
ど面おもてぶせ編笠あみがさぬいて漸おそく、椽先えんさきよよじり寄よ、奥おく様の儀ぎ目推量めすりか、私わたくしの其朝そのあさと

すまして賤い勤の身なりしを、殿様の陰にて此身片付我子の出世、其上又勿體ないは實子の采女様の、は家中へ遣はされ、坊太郎を若殿あらひ、思廻せば、ぞら恐しく嚙やく、奥様の心の中は、どの様も有ぞと思ふよかはるは情け有がたい共、冥加ない共、中上る詞さへ、涙身も餘り、とかふいらへも泣きいたる、マ、其朝のは挨拶采女を外で育るも我夫の深きは思案、有ての事と思ふ上何恨よふはづもなしとり分て坊太郎稚心よ珍らえい、孝心深き生れ性、腹も痛ず能い子を持しと、悦ぶ内よ、鶴が岡の騒動、無事を聞と等しくは思重なるお家の大事、采女様のは身の上よ若やは性我の有るまいかと、思ひ過して恥をもいとせず、此妾で参りしよ、最前笠の内々も我子の顔を見るよ付、定めし深い思案が有ての事どの思へ共、愚鈍な私が落着ぬ様子は聞せ給はれと、道思愛忘れ兼、ちよは碎くる物思ひ、成程、其あんじた過も、何事なふ濟だる

と、我夫のは物語、よしや此上坊太郎が身の上、縦いかなる凶事有共采
女よかへて疎略のせじ、ちつ共氣遣ひえやんかど、始終を聞て其朝の、
有がたいは詞、冥加又餘る身の仕合せ、是とすすも朝夕又祈しかどか
利生かど、互ひ又義理有中、明けていられぬ神の戸の只伏拜む斗な
り、折もこそ有れば、密に檢使の出入と告るこそ、は檢使とい心得ず、自ら
に次の間、密に様子うか、ん、其朝こちへともなひて奥の「一間
へ入りよけり、程なく入り來る檢使の權柄上見ぬ、驚の森口が當時武將
のは師範と、肩で風切り打通れば、左島懸懸又出向ひ、是は、當時發向
の森口殿、は檢使として今日のは入來別しては苦勞千万と、挨拶有は左
様でござる、千里の馬も伯樂あれば顯るゝ道理、一藝の徳天下よ轟き、武
將のは師範と仰せ付けられし某なれば、何が大名小名も機嫌を取らね
ばならぬ事と心得、あれからの見聞、是からの招請、はや多用でござり

中ず、夫の格別かくべつ今日殿中ごんちゆうよて仰せ渡されたる富園ふゑんの仕置承うけつて下
城召じやうされたの先刻せんこく最早さいさうは用意よういめされたかな、かく存玄ぞんげん寄らざるちん玄
中天ちんてん鎌倉武將かまくらぶしやうの代參だいさんとして讚州さんしゆうへ發向はつかう有る、森口殿もりぐちだんの乗物のりものへ過ちな
せし二人の悴せせ武將ぶしやうへ弓引く同前どうぜんなれば、何故用捨なにがため任まからんや、お定めさだめの刻とき
限げんの正八せいぱちつ、とくより用意ようい仕つかてござる、是こゝは左様さやう有りそふな物、是こゝは付
けても去りどの貴殿きだんは運うのつよひお人でござる、どの又何故なにがためさればさ、
あやまちおせし二人の悴せせ一人の貴殿きだんの實子じつしと承うける、又またた今一人を
見ますれば志度寺しだてら又また生立なまし民谷たみやが悴坊せせぼう太郎たろう啞やの業病ごうびやう平癒へいご致いたし、貴殿きだん養やう
子しとせられし由よし、いづれの道みちもものがれぬ筋目すぢめお咎とがめは貴殿きだん有ありて、輕かろふ
て切腹せきぶく有あるべき所ところ、其許そのもとへお祟たたりの參まゐらぬのさりと、お上かみのお慈悲じひ千
万ま、あざける詞耳ことみみもかけず、片かたならぬ天下てんかの政道せいだう規矩きこをよさずし
て、万民ばんみん歸伏きふくなすべきや、其職そのしやく有あらずんば、其道そのみちを知らず、いわ

上りの身を以て、何が何と、なるとやの時計の八つ、間もござれ
らく、は苦勞ながら、と、と、と互ひも一ち物、たばこ盈、軸も吹、此
場の納り、我子いいかよと親との思ひも同じ隔の一間、立聞く其朝蘭の
かた、檢使のお入りと聞かぬも、心ならねば新平が、願ひ有げも白洲の方、揉
手あがらぬ立出れば、左嶋見るより、其方は家來新平、大切な場所へ何
用有て扣て居よと制すれ共、猶おづくと訴訟の体、こやつに其元の
家來までござるか、推參千方、某を誰どか思ふ、鎌倉武將の嚴命よて、
檢使も立たる森口が前、尾籠至極とねめ付くれれば、はつと斗も氣を吞ま
れ、兩手をついて新平が何角、願ひを云いたげも心のはやれど氣をせく
程、口から出兼る、吃の因果左嶋は見兼、何か其方へくれたる、悴采女
が身の落着様子がとくと聞たいかと、尋ね新平兩手を合せ、どふぞ、
若旦那のお命を、助け呉たき物なれ共、鎌倉武將の代參、森口殿の乗物

へ矢を射かけたる二人のあやまち、正しく天下調伏と成て渠等の死罪
も極つたのや、と聞かばつと庭まてんどふ、立聞二人も轉び出、采女の死
罪も極つたか、坊太郎は殺されるか、とはつと二人が一同も胸も張りさ
くうき思ひ、奥方いとややるせなく、系圖正しい青柳の、若殿様と呼るゝ
身が若黨風情の子と成しも、かゝるむざんの最期をする先生からの約
束か、定り事か、とくとき立かこち歎けば、其朝も、ひよんな事仕出えた
マ、父を討れて其敵、得討ぬのみか、其身迄、及まかゝり身を果すの、とふし
た因果のむくいぞや、日頃守護ある金毘羅の、恵もないか、と諸共、人目
も恥ず聲を上わつと、斗も伏沈む、と歎きの理り去りながら、は代參の乗
物も當りし矢の一筋、射人の兩人、いづれか主共知れざるも、二人共も命
を取らば一人は無成敗、是政道の法も有ずと、は評議の上、兩人が名を一
枚宛札も記し、富闔とあし中りし者を、斷罪との仰せあれば、未だ二人が

生死しにの知ぬしれといふを森口せしら笑ひ、左島殿、富闔を以て死罪しざいを定る
といれさく、の評定ひやうていの上かれど、手ぬるい、なぜといわつしやれ、
其元の由實じつし子采女殿は一器量きりやう有る生れ付、末、青柳の一流をも極め、家
相續そぞく有べき骨柄こつがらまつた彼坊太郎は腰抜け武士の民谷が悴、生け置いて
何の役も立たぬやつ、万卒ばんそつの求めやすし、一將いつしやうは得がたしとやせば、爰は
彼森口が了簡りやうかん檢使けんしも立たる某それがしさへ承知いたせば、富闔も何ともいらぬ、
采女殿をお助けなされ、坊太郎をぶち放して仕廻つしやるが上分別と、
根を斷たつて葉を枯からさん、己が勝手のお爲顔傍ぼう若無人わがぶじんも云廻せば、比興ひきやうな
り森口、坊太郎を殺さんとい語かたも落た汝あんちが底意そこい、正しく國府八幡の馬場
よおいて、其朝、森口殿は武將の代參むざと慮外りよぐわいは相叶はぬぞ、
やて見すく、知れた、扱時はた有れば坊太郎も、此左島が養子やうしとなり業平
の歌もわするなよ、程は雲井と成りぬ共空ともら行く月のめぐりあふ迄、

縁と月田を待つがよい、何と森口殿左様でござらぬか、左様か左様でないか、高が腰ぬけ武士のなさけをうけし女、たわ言取上るゝ及べぬ事、左様の申されまい、あせなさ、不時の變化のはかられず、天運いたらざる時の智勇を兼し名將も一戦も打負戰場もかべねをさらす事、古來かまゝ、有事例し腰拔武士と笑ふが、是またくらへずすでござらねど、民谷源八やみく、討れ相果たり共、其場の子細を存せねばあながら腰抜け共申されまい、是のよししない詞争ひ、森口殿、何と此小柄お覺へがござるかな、夫いと胸よぎつくりせき込む森口、刀も手をかけ立かゝるを、ちよと留たる扇のあしらひ、富くじも濟まざる内斷罪のまだ早い、おせきなざるな森口殿と、柳で請る左島が流義とさしもの森口が刀も鞘へ納らぬ此場の落着人も、手も汗握る共折から、さしる時計の正入つ、富くまの刻限、は檢使、いざお入り下さりませふ、いかよも参ませう、

「コトとらつてもこらつても耳をさらへてよつく聞け、二枚の札富圍又突中迄
いづれ共えれぬ命、左島殿と某の外、富塲への相叶ぬと、何がな意地
の當り眼、新平おづく摺寄て、和子の、生死、ヨキきよ
ろりと、待てり、居られさせぬ、私斗り、どうぞ、だまれ、こど
ふぞお慈悲よそふおつえやる、だまれといふも下郎めが、イヤ、だ
まつている程、此願ひ、えませぬ、其様よ、顔ふらずと、
是斗い、是非共お袖よすがつと、取付腕先もぎはらひ鉄骨の扇ふり上
げみけんばつえり、何とさつえやる、何とくり慮外やつ、一
人も富塲への叶ぬと、某が私でない、鎌倉武將の正上意、草履摺
みの下主下郎め、すさりおらう、左島殿、いざ案内と先立打連奥へ入
跡、新平の身繕い裾ばせ折て欠行を、奥方庭へ飛でおり、新平、待
た、まちやく、扱ひ其疵付けられて、堪忍ならず、鬱憤をはらすのか、

腹は立ふが森口の武將の檢使、過ち有てり夫の難義、いやく富闥中らぬ
先、若殿を奪ひ取、此所を、立退分別と、欠行向ふへ其朝が、そふりち
らぬとさへるを、あためんどうなど踏飛し、奥庭さしてかけり行、俱も
つゝいて其朝が、欠入る袂を、えつかと取る、奥様、何と遊ばす、何共せ
ぬ、奥庭へそなたの行事、成るまい、又なせよ、富闥の場へ外の者の
叶はぬと、武將からの嚴しい云付、其又嚴しい其場へ、新平はなせやり
なさつたそんな身勝手聞て居る隙がない、退て通したく、勝
手で有ふが、何で有ふが、蘭のかたが大事の、ほんそ子を助ける迄は
そなたを、通す事はならぬ、通さぬ迎女の念力、通らいで置ふか
と突退、押退、かけ行を走り寄て引戻し、そなた衆の子を、いとらせ、大事
の采女を殺さそか、奥へやる事ならぬ、見事お前が留なさるか、く
どい留て見せふと、こまやくな事と振りほどき、用意の懷劍、我子の恨

あしらい兼てこなたも、乃向ふ懐劔抜合せ、突は開き開け、突ひるま
ず去らぬ切先、乃先顔の上氣の紅白粉、どけて流るゝ龍田川、色香争ふ其
所へ、涙片手、新平が、かくと見るを、待たゝと止め
ても耳へも入れず争ふ真中脱捨し、うちかけひらりと懐劔を、巻て押へ
てどつかと座し、早まるまい、そなたの新平、様子はどふぞや、子細
は何と、兩方から、問詰められてうろくくく、せかすと様子の
どふぞや、二人の名を記した札箱、又入て突上げたは、坊太郎で有たか、若
殿でござんしたか、富くじよ、突あがつた、若旦那、采女様
さく、そんなら死罪、又極つたか、はつと斗、泣倒れ、正体なければ、悦ぶ
其朝嬉しや、有難や、奥様、噂はした、あいな女じやと、おさげし、みも
いか斗り、只何事も、定り事と思し、召あきらめ、堪忍下さりませ、是か
ら、思ひの儘、本望、遂るは今の内、そふぞや、と身繕ひ、手の舞足の踏

度なく、奥の一間へ欠入跡、首引下て立出る森口源太左衛門、其首をど
かけ寄るをはつたとねめ付、暇乞かえたかるふが、下郎め顔が見たいか
叶ぬ事、鎌倉武將の師範たる源太左衛門、ちよつとでも慮外せむ何干
人でも斯の通り、何と威勢ひとい物か、と立出るを引留め、せめて
まばしと取り絶る二人をはつたと蹴飛ばし、見返りもせず出て行跡
又奥方狂氣の如く、其首返せと欠出すを、と留る奴がたぶさ髪むま
やぶり付てせきのぼし、爰な奴づら、采女養子よのやつたれど、そち
が爲まやぞよ、假令夫の心のどふ有ふ共、子のは是非共武士よすると、現
在わしが手を下げて頼んだをわりや忘れたか、女の主と侮つて、構ひ
でも大事ないか末頼みない子と思ひ、なせすゝめて過ちさした、くお
道理だなせ殺した、まどふてかへせ活して戻せ、尤、云譯も
何よも聞かぬかへせ、くくくくとたくしかけ、怒つ泣つ身をふるひ

狂氣きやうきの如く見へければ、ズ、ハ、とせけばせく程いとやあを物いられねば
ぞだんだ踏胸ふみむねを叩たたいつ口の端はたかきむしりく、詮方せんかたつきて落たる刃腹
又突立引廻せば、ま、くいかよと驚おどろく奥方おくかたく新平しんぺい、何狼狼腹切た、どふし
た譯わけぞや、是こゝお騒さわぎなさるゝな、お前様のお歎なげ、此奴こゝれめが骸からた又餘あまの
てせつなさ悲かなしさや上うんも口廻くちまわらぬ、生質なまじつたる吃くの業病ごうびやう、肺はいの臟ぞう々し舌したへ
つる筋きんを切きり忽たち口くちは廻まわれ共命きやうめいがないと、追た追た様さの兼かてのお咄はなし、奥様へ
の申まを譯わけせつないが餘あまて命いのちを捨肺すてはいの臟ぞうの筋きんを斷たず上ある一通いっり、お聞きな
れて下くださりませと、苦くるしき息いきをほつとつぎ、いか成事なりごとや、は主人しゆじん左島さじま様
のかつえやるよ、子こを見る事こと父ちち又またかす、悴せ采女さいによが生立なま立たを見るよ、中な々
武士ぶしの家いへをつがすべき人相ひとあひならず、幸さいひと器量きりやう有ある悴せ一人ひとり設たし上あり、采
女さいによのそちよ養子やしよやると、主命しゆめい是非せひなく、コレ、又勿また体たいない青柳あおやなぎ家の若殿わかしら様
が、若黨わかしら風情ふうせいのは身持みもち、爺おや様さまの仰おほを守つて、此新平こゝしんぺいめを、爺おや様さま、くどおつ

まやる時の冥加めいがなさ、身み又餘あまつて恐おそしく熱あつい涙なみだをこぼせしは幾度いくたびか式しき
日ひのお禮れいも坊太郎ぼくたろうが上下じやうたふ立派りつぱ又着飾きざつて登城とじやうするを見るみるも付けて
も、どこの馬うまの骨ほねやら、牛うしの骨ほねやら、知れもせぬ者ものを、儕等せいちが殿様とんやう左島様さじまやう
の、は亂心らんしんでもあされぬか、眞實しんじつの和子様わこやうを家來分けらいぶん又退下たいげげ、小坊せうぼく
主ぬしを子息しそくとい思おもしいやら口惜くちやくいやら假令たとへ旦那だんないどふおつしやる共
は家いへをつがそふと思おもふ矢先やせん、お前様まへやうのお頼たのみ、は尤なほな事ことだ己おのれやれ天晴あつせれ
な侍さむらいよしやうと思おもひ、弓ゆみや馬うまを精出しやうしゅつして勵はげましたが冥途めいじゆの道みちの導みちびき
とい、知らななく、おいとまや、昨日けふも翌日あすは馬うま賣せめませうと上あた
ら、ぞくぞくと小踊せうおどしてのお悦えつび、夕ゆふべもろくよお寝ねもせず、くいかふ
くと冥途めいじゆの催促せいきおしや替かひの若旦那わかしやだんなを、盛さかりも見みせずむざくと散ちし
て退のたは此こゝ奴やつこめが一生いぢゆうの誤あやまり、若旦那わかしやだんな今いま参まゐります、今いまお供つゐります、劔つるぎの
出いも三途さんづの川がはも抱たいて渡わたる、おふて登のぼるぞ待まちてござれ、やつぱり殿とんの仰おほせ

の通りぞうり摺つかみのナイナイくを、教おしましたら斯かちは有るまい、奥様おくさまヤコレ堪忍かんにん是
じや、くくど手を合せ拜おがみつ詫わがつ身をもだへ五臟ごぞう六腑ろくぶを込み上れば
疵かさの口々くちくち迷まよひしる血ち汐しほは瀧たきを、あらしそへり、間誤あやつたコレ新平しんぺい、そふした心
ど露つゆしらず、よしない恨うらみこらへてたも、此上このかみの生存せいぞんへて物思ものおもひ、歎なげき重
ねて何角なんかくせん俱とも又冥途めいどの道連みちづれれど、刀や又また縫ぬれ、暫しばらく、兩人先待ふたりまててど
聲こゑをかけて、立出たる青柳左島あおやなぎさだ、一つの箱はこを携たづへ出、二人が中なかよすつくと立
駈か采女さいにょを殺ころせしは新平しんぺいが落度おちど又あらず、外と又方便てだてを拵こしらへて、殺ころした者
が有るはいやい、と二人が仰天ぎやうてんすれば、間驚おどき、尤なほ、其證しやうこ據見しるすべし
ど持もたる箱はこを、はつしど割わり、間兩人二枚ふたりまいの札しやく、讀よんで見よど投出なせ、間双
方ふたへ取上とりて、此札このしやくよ記しるた、若黨わかつう新平しんぺい、悴采女せむしさいにょ、コレ
新平しんぺいが駈采女かさいにょと書かけて有あり、間アアどふして何なにとしてど二人が不審しん、夫見つまて
もがてんが行ぬか、二枚の札しやくよ新平しんぺい駈采女かさいにょと記しるしたれば、百度ひゃくど突つとて

采女が名が上らいで何とせふ、坊太郎を助けん爲某が皆拵へ事、又
若旦那の命よかへ、坊太郎をお助けなさるゝは所存はな、不審は尤、一
通り云い聞さん蘭の方は元より、新平も能く聞け、倅を捨て坊太郎養子
とあし置其子細、日外八丁繩手よおいて正しく金毘羅權現を、あらた
よ蒙むる神託、讃州國府八幡まであへなく討れし民谷源八、其敵たる
森口、今日本よ誰有て續く者なき、武術の達人、是よ向ん流義こそ其方
外あらじ、世倅坊太郎よ與義を傳へ、本望遂させ與ふべし、我も守護な
し得させんと、神の告は武門の譽身の面目と品川を連れ歸つたは坊
太郎、此左島が養子となし、鮎を汝よくれたるも敵よ油断をささん爲、此
度武將の代參として森口讃州へ趣けば、彼地よおいて坊太郎よ敵を討
さん我願ひ、途中よおいての過は打捨置かれぬ表向、御代參の名目重し、
若し坊太郎よ過有らば、神慮よ背く恐れ有りど二枚の札よ采女と記し

現在駒を殺せしも坊太郎は敵討せんと、神へ誓し我けつばく、天下は開
ふる敵討、青柳の氏を輝すは、孟宗郭巨が孝心もはるか増たる駒が手
柄、出かえたあゝ汝が冥途の導きせし、馬乗馬場を今日方は、采女が原と呼
びか、し、是を未來の土産として成佛せよと青柳が、初て明す義心の程
適れ、靈夢の助太刀と世は唄しも、斷りなり様子を聞て二人の驚き、そん
なら若いあなたのため、お役も立て死ましたか、新平、我夫の今のお詞、
自らも俱うと悦んで居ると、采女も逢て傳へたも、そなたも又主と成
り家來と成も宿世の縁、三世の契を忘りやんなや、お旦那のお物がた
り、承つたは智識の引導、千部万部の經よりも、はるか増つて有難い、未來
へ、追付若旦那、此通り申上たら、嘸お悦びなされませう、新平、適れ武
士ぞや、よふ死だ、出かした、くくど口は立派、目も涙泣、いなを、哀れ
なり、斯る歎きの時しも有遙、聞ゆる船歌、左島さつと耳をば立樓、

欠上り、遠目鏡みて見渡しし、坊太郎、森口が乗船早沖中迄乗
出せり、用意く、と呼れば、今會稽の此時ど、りく出立坊太郎、勇
いさむ其粧跡、引添其朝が其儘庭へ欠下りて、奥様や新平様、だん
のは様子、を聞く程せつない私等親子、はゆるされて、伏拜むを、よしな
き歎きと制し止め、坊太郎、假令權現守護有共、森口の聞ふる大敵、侮
らば危しく、兼て傳へ、我奥義、心の備へ、いかよ、と問かくれば、
床の間、屹度打見やり、生けたる紅梅、退つ取て、爺様を討つたる仇、假令鬼
神なれば、とて、本望、遂る、眞斯と、立寄る、巖の手水鉢、梅の楚の拜み打、か
ら竹割、なしてけり、左島思、のす扇を開き、見事、と詞の餞別、是か
直、發足と、立出る、親子新平が、羨しげ、打見やる、哀れを跡、三つ瀬川
三途の瀬、ふみ、敵の魁、さらば、と夕づく日、空、ひらめく金の幣、是
金毘羅の神力と、今の世迄も有と、傳ふる、民谷物がたり、末世の龜鑑と

なりよけり

○第十 敵討の段

コレハ遠路の所は苦勞千万我ハ貢之介家來最上團右衛門三木數馬と
アす者則源太左衛門請取の爲疾方は下向を待ち請は使を馳走アせ
と主人の云付け先大切の源太左衛門をお請取りアす上船場迄ハ入り
有ては休息下されいコレハ町寧則ち敵討のは檢使として主人青柳左
島交代の序は願有て此度の役目早着船ハ間も有まじ坊太郎も其時一
所上様迄は聞え達せし大切の敵討隨分は鹿略なき様ハ心得られよ相
人源太左衛門を慥ハ渡えアす上は主人着岸待合す間えばらく休息
ハ案内ハ委細承知仕るナニ侍中お請取アせしあみ乗物夫へ直し旁を
ハ案内と下知え隨ひ先え立皆打連て行跡ハ團右衛門こへをひそめ
數馬殿貴殿もいつたん師弟とちられし森口殿拙者も遁れぬ武術の門

弟愛の二人が了簡りょうかんにて先生を助ての進せられぬか。最上の詞共覺へず拙者一旦弟子となりしは敵の實否じつなさぐらん爲殊ことも大切なる今日の役目見のがしての上への不忠此儀斗こゝろに罷ならぬ。其所をいか様もヤとて迄もなりやさぬと云つゝの後の乗物より突出す刀の數馬かずまが肝先かん只一差ひとさしもあへなき最期網引さいごあみひきちぎつて立出る森口今も初ぬ團右衛門の心底過分こゝろく。其お禮の追ての事斯斗からんと存せし故用意致せし此金子是を路銀ろぎんといづくへなりとも。お志忝ちげんひ辭退ひたいやすず受納致うけうけす。扱いらざるお禮の段々兎角する内左島めが目よかくらば又もや先生の比身の上幸邊さいへんり。案山子の簀笠姿をかへて片時へんじも早くも最上もがらが取て打着する簀さ又またエバし。天が下隠れ笠ぞと森口が落行向ふへ來かふる左島さじまヤや比興ひきやうなり源太左衛門所詮ところせんのがれぬ汝なんぢが運命憶病未練うけひやうみれんといづくへ行い。夫知つたらば觀念くわんとずるりと扱て切り付るをくゞつて

左島が眞しんの當うんど斗りよ倒るゝ森口又も切込む最上もがみか刀開ひらひて丁と打ち落しくし上たる用意の早なり折つちやから駈はせ來る内記の手を突き
ま左島公よてましますか私事つちやの樋谷内記甥坊太郎への厚恩かうおんいつか
報はらじ奉らん就て今日敵討の檢使けんしよと主人の詞蒙る故青柳公の
跡あとよもつらなるの恐れ入奉れ共眞平まごへは免遊めんばされませふ、扱あつかひ聞き
及ぶ坊太郎が在父内記まごとの其方よな早速さがらや聞けるの此繩なわ付源
太左衛門を見遁のがしたる上嚴命蒙る某それがしへ手向いなしたる大罪人急度仕
置おきや付けい又丸龜家の重寶松影の硯てらのふじぎよも某それがしが手よ入つたれ
ば貢之助殿へ對面たいめんの上渡しやさん何の共有れ森口をと手練しゅれんの活くわよ氣
の付森口引立召されい、左島が詞よ諸同勢引立てこそ急ぎ行く天の
造まきる孽わざがいの尙遁まごべし自造みづからる孽わざがいのがれがたなき源太左衛門丸龜の城下
よて敵討有べし逆方一町の行馬からいをえつらい檢使けんしの役やくの樋谷内記かた

への床几とこざし又青柳左島威儀あおやなぎさしまゐぎを正ただせし野袴のびかまの出立ちもけふのはれ勝負しやうぶ早立合はやたちあひの刻限ときげんとあづちの太鼓打鳴たいこうちなげせばのさく入來いりきる森口が大おほだらかい込白装束いんぱくじやうぞくこあたの小太刀こたがたりしげ又鉢巻はちまきまやんと坊太郎ぼくたろうさもかい
く敷いさみの聲かけこゑく森口源太左衛門もりぐちげんたさゑもん日外國府八幡にっこくごふはつたねよて殺ころされ
さしやつた爺様おやさまの敵民谷坊太郎たかみやぼくたろうが討うち取とり尋常じんじやうよ立上たてあつて勝負しやうぶく
と詰つめ寄よれば源太左衛門げんたさゑもんをせ笑わらい、へ、小びつちよめがぬかしたり武藝ぶぎ
よかいての日本にっぽんよならぶ者ものなき某たれと勝負しやうぶなとしのまだ殊勝しゆせうさかどな
げなけれど相人あいにんよ成なりり現世げんよの暇取いとまらしてくりやうと上見うへみぬ鷲じゆの尖すさく
も目釘めくぎしめして身構みかまへす群集ぐんじゆ押分け其朝あしたの行馬ゆきまの外ほかよ聲こゑを上あげ是こゝな
るは其子こゝろが母夫ははととの敵たかみも討うちたければどうぞ助太刀すけたがたさしてたべと聲こゑの
限かぎりを呼よべれば左島さしまの威儀ゐぎを改あらためて其朝あした孝かう心しん稀まれ成なりる坊太郎ぼくたろう金毘羅かねひら
權現ごんげんの加護かごといふ天あまの感應かんごう有あるなればかよひき女の助太刀すけたがた無用むじゆうと物

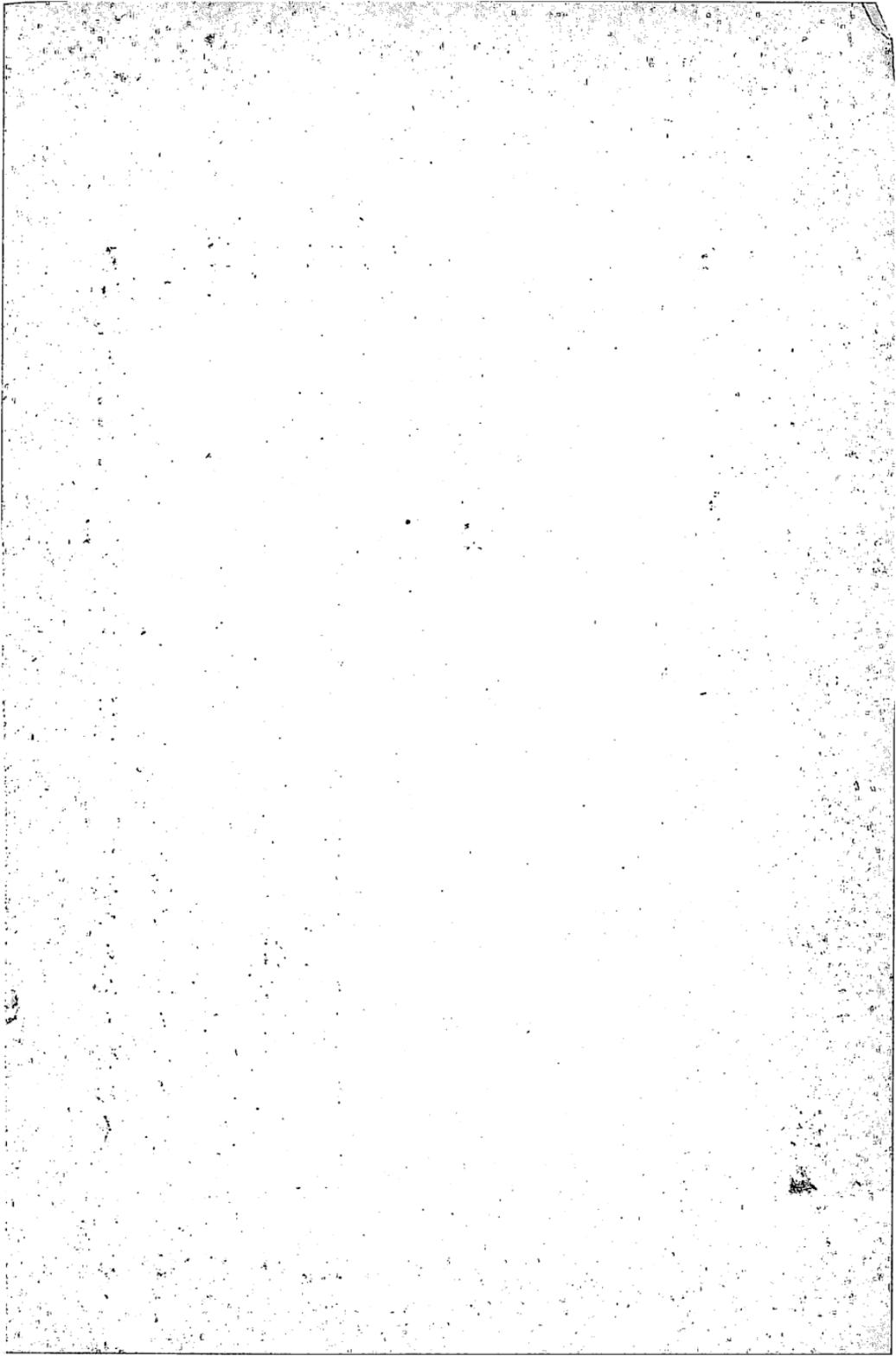
和らかゝ押し宥め時刻うつればとくくどさしづゝ二人の目禮も故
實正しき身の備へくどかけさへ目配勝負と諸見物かたづを其朝
の南無金毘羅大權現我子の身の上守らせ給へと心の祈念油斷なく
らつて打込む刀の電光ひらりとほらふ早わざの目よさへきらす權現
の陰身も添ふて稚子を守らせ給ふ神通力となたの強力手練の大兵一
眼二早足火花をちらし暫し勝負もなかりしが森口ひるます切込めバ
あしらい兼て坊太郎既又危く見へけるがふまぎやさつと神風の飄然
として砂石を飛ばし吹かけられて源太左衛門眼くらんでたぐく瘞
バゑたりと只一討こしやくなと切りはらへば左島聲かけ待て兩
人勝負は見へた坊太郎手柄くと稱美の詞内記はふしんの眉をえり
め恐れながら同度はは覽の如く森口の以前よかはらず坊太郎勝たり
との意遊はず心の是こそ青柳流の奥義坊太郎が勝つ極まるせう

この是と扇遣つ取肩先丁と森口が五體は二つよから竹わり氣味能さ
いごよ行馬の内外討たり手練と譽聲山も崩るゝ斗りなり其朝嬉しく
欠込で一禮つどく青柳が厚き情よ坊太郎首尾能く敵討つ上の兼て
の望出家得道身の成る果は東成る花の上野よ名も高き觀成院の法の
庭墳墓も今よ隠なき古今よ稀我る仇討は金山彦の思頼治る御代の民
生も御威を惶み奉る

寛政元酉二月

金毘羅
利生記
花上野譽の石碑 終

花上野



明治廿四年十二月十九日印刷
明治廿四年十二月同日出版

東京日本橋區通四丁目四番地

發行兼
翻刻者

內藤加我

印刷者

東京日本橋區新和泉町壹番地

瀧川三代太郎

東京日本橋區通四丁目四番地

發兌

金櫻堂

